女子新國語讀本

安藤正次
東條操 共編

巻六

46
810
昭9

42322
教科書文庫
4
810
42-1934
20000
69141

昭和九年一月二十日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

女子新國語讀本

卷六

臺北帝國大学教授 安藤正次
學習院教授 東條操 共編

株式會社 三省堂

広島大学
教
69141
図書

資料室
46
810
昭9

龍井村附近　（第六課參照）

巻六　目次

一　紅葉を焚いて　北原白秋　一
二　東大寺　薄田泣菫　五
三　山村の祭　荻原井泉水　九
四　家紋　沼田頼輔　一六
五　月雪花　芳賀矢一　二五
六　朝鮮の四季　遅塚麗水　三三
七　熊野落　（太平記）　四一

八　伊勢・志摩の海　田山花袋　四九
九　安乘の稚兒（詩）　伊良子清白　五六
一〇　をさな兒　小林一茶　五八
一一　一茶を語る　相馬御風　六〇
一二　時雨（俳句）　諸家　七〇
一三　俳句に就いて　高濱虚子　七三
一四　川柳と女性　山内素行　八三
一五　童心童眼　吉田絃二郎　八九

一六　少女の歌（詩）　北原白秋　一〇〇
一七　靜かな友達　生田春月　一〇三
一八　乙若　（保元物語）　一一三
一九　浮島が原の對面　（義經記）　一一三
二〇　先生の許へ　吉村冬彦　一二五
二一　手紙雜感　三宅やす子　一三〇
二二　婦人と文學的教養　本間久雄　一三七
二三　春のおとづれ　永井荷風　一四三

二四 扇の的 （平家物語） 一四八
二五 信仰 釋宗演 一五三
二六 蜜柑 芥川龍之介 一五六

—目次終—

北原白秋 名は隆吉。詩人。歌人。福岡縣の人。明治十八年生。

女子新國語讀本 卷六

一 紅葉を焚いて

北原白秋

一

紅葉して來た。庭の楓が紅葉して來た。紅葉ばかりになつてしまつた。「寒くなつた。」と私が云へば、妻も「さうで御座います、寒い朝で——」と袖を合はせる。さうはいふものの、たとひ二十日でも住み馴れて見ると、この離家が何とはなしに古びて來て、やつぱり二人の住ひらしい。二人もどうやら落着いて來た。「紅葉でも焚いて見ようが。」と私が云へば、妻も素直に「焚いて見ませう、寂しいから。」と庭に下り立つ。竹の箒で私が掃けば、蹲（しやが）んで妻が拾ひ

集める。かさこそと、落葉と落葉とが擦れ合うて、それを二人で集めてゐれば、今はもう秋も限りと思はれる。遠州風の濡石の上、枯れた芝生の凹みなどの落葉は一しほ哀れ深く、土の濕りもにじみ過ぎてゐる。

二

煙が立つ。煙が立つ。煙が立つ。庭の楓の紅葉の陰から煙が立つ。紅葉を焚いて、ぷす〳〵と白くくすぼる煙のかげで「溫かいぞ。」と私が蹲めば、妻も諸手をかざして蹲む。青

焚火

い枳殼の小枝などまた折りくべて「長い感冒であつた。」と私が云へば「私もどうやら感冒氣で——」と、妻もわびしい。「大切におし、旅で病んでは心細い、私も今度は賴りなかつた。」と、私も紅葉をまた火にくべる。「ほんとにね、それでも早くお癒りになつてようごさんした。」と、妻もまた紅葉をくべる。「それもみなお前のお蔭だ、よく來て呉れた、あり難かつた。」と、しみ〴〵、私は煙に咽せる。「いゝえ」と妻も、向ふへ立つて、紅い紅葉を拾つて來る。「早く歸らう、お前がまた病氣にならないうちに。」と云へば「ほんとに早く歸りませう、何と云つても自分の家がいちばんいゝ、旅は寂しい、心細い、殊にこゝらは霜が深くて、もう雪にでもなりさうで。」と、一きは赤く火を吹き立てる。煙が立つ。煙が立つ。紅い楓の葉陰から煙が立つた。

三

夢は枯野を云々　「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる。」（芭蕉）

煙が立つ、煙が立つ、庭の楓のもみぢの葉から煙が立つ。旅に來て長らく病んだが、實に心ぼそいものであつた。俳諧の聖芭蕉でさへも、旅に病んでは寂しかつたか「夢は枯野をかけ廻る」と云つたではないか。「お互に大切にする事だ、惜しい物は命だ。」と私が云へば、妻も寂しく笑つて咽せた。善い煙だ、寂しい善い紅葉だ、せめてもう少し溫まつてと、紅葉を焚いて、梢の紅葉ももう末かと仰いで見れば、はら〳〵とまた滾れてくる。

もう善い、もう善い、善い程に焚いて朝飯にしませう。煙が立つ。煙が立つ。紅い楓の葉陰から煙が立つた。

（白秋詩集）

薄田泣菫　名は淳介。詩人。文章家。岡山縣の人。明治十年生。

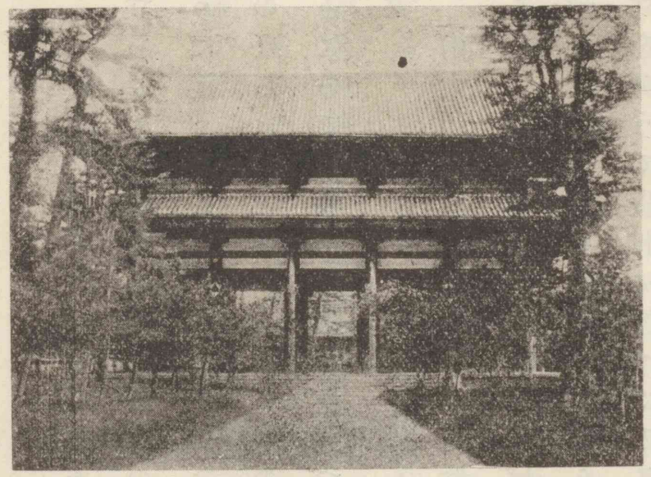
密迹・金剛　寺院山門の兩側に立てる仁王尊で佛教守護の神。

二 東大寺

薄田泣菫

月がよいので東大寺のあたりへ出かける。すく〳〵と大樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の氣が煙のやうに迷うてゐる。このやうな宵に木立の下路で迷ひでもするものなら、きつと鬼の落した蠱の係蹄にかゝつて、夜一夜歩き廻つたところで、いつかな路標を見つけることも出來なからうと思はれる。

南大門は撞木杖をついた翁のやうに、支柱にもたれて、そのすばらしい身體を、ぢつと空に擡げてゐる。密迹・金剛の二力士は、この靜かな宵にも、その三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉を張り寶杵を揮うて、張肘に控へてゐる。銀の雫のやうな月明りが盜むやうに窓にこぼれて、肩よりふくら脛にかけて半身に流れる。肉む

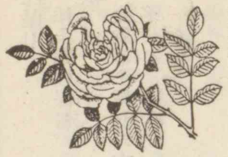


南大門

らの色がいかにも冷たく、また美しい。ぢつと見てゐると、いかめしい顔のどこやらに追懷の夢ごこちが漂うて、靜かに吐息をつくかのやうに思はれる。併し、それもほんの一瞬の間で、再び劫初このかた寶杵を揮うて、教法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。

佛殿の中門は閉されてゐる。百間にもとゞかうといふ廻廊は、鳥の翼のやうに左右に開いて、はては見えなくなる。門の透間から、かいま見ると、金堂の扉は靜かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ

永祿の昔 永祿十年、松永久秀の兵火に罹かる。



十六夜薔薇

密迹・金剛の二力士

瞬いてゐる。堂守の僧でもゐるのか、どこやらに囁くやうな響がして、それもやがて消えてしまふと、あたりはもとの靜寂になる。天人の足音も聞えさうな宵である。このやうな靜かな夜を、ぢつと佛殿の闇に閉ぢこもつて、毘盧舍那佛は何を觀じてゐられるであらう。永祿の昔佛殿が炎上してより後、百三十餘の夏冬は、佛はいつでも露宿でいらせられたといふ。その頃は、夢のやうな月夜の靜けさに、醉心地になるまでも見とれてゐられたであらう。どことも知らず十六夜薔薇のにほふ卯月の宵に、春日野の木

佐保川　添上郡佐保村。
秋篠　生駒郡平城村の古名。

立より洩れるながし目のやうな月明りに濡れながら、又は佐保の川瀬に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたりに沈み入る月影を眺めて、ひとり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、どれほど美しく又偉大なものであつたか。今宵はそれらの追懷に、しみじみと寂寞の盃を味はうてゐられるかも知れぬ。

あたまの上で鐘が鳴る。九時ださうな。さびれた舊都の宵は、もう夜半過の心もちがする。

（落葉）

大佛殿

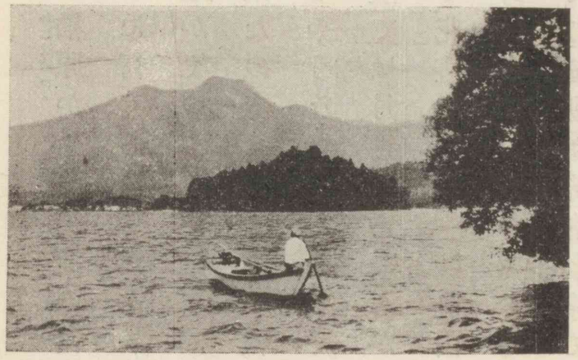
三山村の祭

荻原井泉水

柏原（かしはばら）から、舊街道の落ちついた家なみを北へ、爪先上りになるまゝに行くと、家がだん／＼になくなつて、それから先はたゞ廣い國道がまつすぐに延びてゐる。私は荷物を停車場に一時預にして來たので、ステッキの代りに持つた蝙蝠傘一本の身輕さを、散歩するやうな氣分でゆつくり歩いた。一茶が御自慢であつた――「信濃では月と佛とおらが蕎麥」と彼が詠（うた）つた――蕎麥畑が澤山あつて、花盛である。妙高山と黑姫山がよく晴れてゐる。妙高山の裾野は實に美しい。その綠を敷いたずつと上の、ぼうつと煙が揚つてゐる所が赤倉溫泉であらう。そこに私が滯在してゐた時、隣室の客が暗い夜の底を指して「あそこに灯が一つ見えませう。あれが野尻湖の村の灯です。」などと話してゐた、その野尻湖への道を

荻原井泉水　名は藤吉。俳人。東京市の人。明治十七年生。
柏原　長野縣上水内郡柏原村。
一茶　通稱は彌太郎。信濃國（長野縣）の人。俳人。文政十年(一八二七)歿、年六十五。
妙高山・黑姫山　共に長野・新潟の縣界に近い。
赤倉溫泉　新潟縣中頸城郡名香山村にある。
野尻湖　長野縣上水内郡濃泥村にある。

私は今歩いてゐる。そして、かの赤倉を今度は下から一すぢの煙をあてに眺めるのであつた。



野尻湖

道は平らだが、人通りは極めて淋しい。その中に晴着の子供をつれた人人の幾組かを見たが、それは、けふ野尻にお祭があるからだといふことを野尻に近くなつてから知つた。道の端には、墨の痕（あと）のさわやかににじんだ幟が立てられてゐる。吹流（ふきながし）のやうな色布を初秋の風に流してある。そのあたりから右手に湖水の一角が銀をたたへたやうに光つて、村の家がちらほらと續きはじめる。祭禮の提灯がつつてある。太鼓と笛の音が

宇賀神社　野尻湖の東岸に近くある琵琶島に祀られてゐる神社。

聞える。村の人はけふこの淋しい村をできるだけ華やかに美しく飾つたり、賑やかに景氣づけたりしてゐると見える。それにしても、何といふ淋しい村であらう――。

梨や林檎を筵にひろげた店、氷水を賣る店などの間を湖の方へ行くと、うねうねとした青田の中の路は、小學校のまはりを一周して、初めて湖の前に出た。宇賀神社を祀つてあるといふ琵琶島は尊げに茂つて、鳥居の色も鮮かに水に映つてゐる。舟が二艘、神輿を載せ、旗を立てて浮かんでゐる。岸には島への渡舟を繋いである。太鼓と笛の音はそこから響いて來るのであつた。近在からこの祭に來たやうな人々が、札を買つてはそれに乘る。一艘に滿ちると、舟は岸を離れるのである。私もその舟の中の一人になつた。

「こんなに淺いのか。」

「何の先へ行つてみろ、底がみえやしない。」
「綺麗な水だな。」
「壜(びん)を持つて來りやよかつた。」

一つの舟に乘つた男や女がこんな話をしてゐるうちに、船頭は棹をやめて櫓をとつた。水を見ると、水は青々と靜かに深い。空を見ると、空も青々としてほのかに深い。その中に晝の月が白く浮出てゐた。

私の乘つてゐる舟は、神輿を載せて漕いで來る舟と行違つた。その神輿は、けば〳〵しい色紙を貼付けた飾物のやうな作りで、恐らく村の青年等の手になつたものであらう。それを持つて本社に詣で、今、引返して來たところと見える。神輿の周圍には青年たちがぎつしりと乘りこんで、銘々に鳴物を合はしてゐる。その太鼓を打つ青年の勇み方はどうだ。身體ぢゆうに力を張りつめて、

自分の肉體そのもので太鼓をひつぱたいてゐるやうに、腰と腕との彈力が躍つてゐるではないか。その笛を吹く青年の喜び方はどうだ。感興に溢れる心を吹きこんで、細い竹の管が吹き破られてしまひさうに、管を抑へた兩の手の指が律動に顫へてゐるではないか。皆經木(きやうぎ)で編んだ帽子を、おそろひのやうにかぶつて、健康らしい黑い顏に、大人ぶつた眞面目な目つきをして、その手や肩が子供らしくはしやいでゐる。全く皆眞面目なのだ。眞面目にお祭を祝つてゐるのだ。この淋しい湖の村では、お祭の日ででもなければ、かうした賑はひを見ることはできないのであらう。それも、自分たちが太鼓を打つたり、笛を吹いたりしてつくりあげる賑はひなのだ。その賑はひに青年達は醉うてゐる。そして、もつともつと醉ふために、もつともつと賑はひをつくるために、ます〳〵力をこめて太鼓をたゝき、ます〳〵息をこめて笛を吹いてゐる。

　私はこの青年等の心がかはいく思はれてならなかつた。ほんたうに淋しい若者たちだ。しかしまた、私たち都會の賑はひの中に住んでゐる者の間には、果してこの村の青年たちのやうに感興に燃える日が、一年に一日でもあるであらうか。都會には、不斷の劇場がある、音樂堂がある。觀るべきもの、聽くべきものは到る所に人を待つてゐる。けれども、そこには誰も、一人の見手として、聽手として行くのだ。耳や目を通じて、かすかに心の中にひゞく味を味はふのだ。皆が自分の心の中からほとばしる感興を合奏するといふ樂しみはない。都會の空氣は華々しいとはいへ、そこはあくどい華やかさに疲れてゐる。眞に活き〳〵とした感興を産む所ではない。さう思ふと、私はこの淋しい村の青年の心持が尊く思はれてならなかつた。

　靜かに聳えてゐる妙高・黑姫、靜かにたゝへてゐるこの玲瓏(れいろう)とした湖、そして、綠の滴るやうな島の姿。島に鳴く蟬のすが〳〵しい聲は、青年等が吹く笛の音と調子を合はしてゐる。水の面に小波を起して吹き通る涼しい風は、青年等が打つ太鼓の音を遠くの遠くの野のはてまで傳へひろげてゐる。今、こゝ信濃の國の山また山の中にたゝへられた美しい湖の里で、自然らしく淋しく、自然らしく美しい人間の歡樂が、昔ながらの神の名と、神のためといふ形式のもとにふるまはれてゐるのである。

　私たちの乘つてゐる小舟は、島の棧橋のもとに着いた。赤い鳥居と石段とがすぐ目の前に仰がれる。高い木々は低くまでこんもりと枝を垂れて、おごそかな神の清い座(いま)し所にふさはしく、汀の砂は初秋の光に輝いてゐた。

（山水巡禮）

沼田頼輔　文學博士。紋章研究家。神奈川縣の人。

四　家紋

沼田頼輔

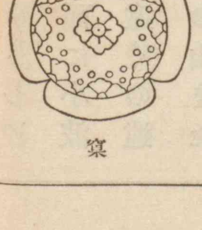
公家の家紋の起原を尋ねると、三つの原因がある。其の一は車の文様から轉じたもの、其の二は衣服の文様から轉じたもの、其の三は特別の由緒にもとづいて定められたものである。

公家の家紋が、車の文様から轉じたものであるといふことは、例へば鎌倉時代の初、近衛家は車の文様として牡丹を、花山院家は杜若を、徳大寺家は窠を用ひた如きであるが、後世に至ると、これ等の文様は、いづれもその家の紋章として用ひられるに至つたのである。

衣服の文様から轉じて、その家紋となつたのは、欠

牡丹

杜若

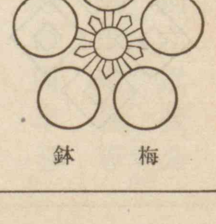

窠

東風吹かば云々　「東風吹かば香おこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ。」

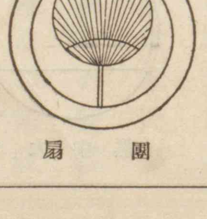
我家の龍膽襷の如きである。

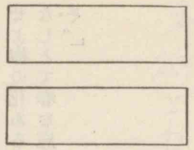
又、特別の由緒にもとづいて家紋を定めたものとしては、菅原氏の梅鉢紋、若しくは三階松紋の如きがその例と見るべきである。菅公が梅を愛せられた事は名高いものであつて、「東風吹かば」の歌詠や、紅梅殿の書屋、その他一夜松の故事の如きは、最も人口に膾炙してゐる事柄である。從つて菅公の子孫から出たものが、家紋を定める場合に、右の如き紋章を定めて祖先を偲ぶといふが如きは、當然あり得べきことと思はれる。

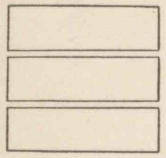
武家の家紋は、主として旗及び幕の徽號から起つたものであるが、又、公家の家紋の如く、衣服の文様から轉じて、その家紋となつたものもある。


梅鉢

三階松


團扇

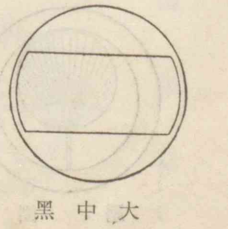

二引兩


三引兩

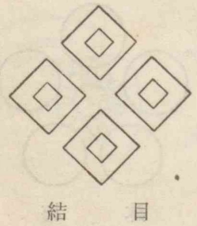
源平時代に於て、源氏は白旗・白符を用ひ、平家は赤旗・赤符を用ひ、武家の棟梁たるものは、未だ紋章を用ひなかつたのであるが、その旗下に屬してゐた諸國の武士の中には、既に自家の目標として、旗に紋章を据ゑたものがあつた。例へば、武藏の兒玉黨が旗に團扇の紋を据ゑた如きがこれである。

幕の紋から轉じたものを擧げると、新田氏の大中黑、足利氏の二引兩、三浦氏の三引兩の紋の如きで、その形狀から見ても、明らかにこれを知ることができるのである。

衣服の文樣から轉じて家紋となつた一例を擧げると、熊谷氏の鳩に寓生（ほや）紋、佐々木氏の目結（めゆひ）紋の如きがこれである。


大中黑

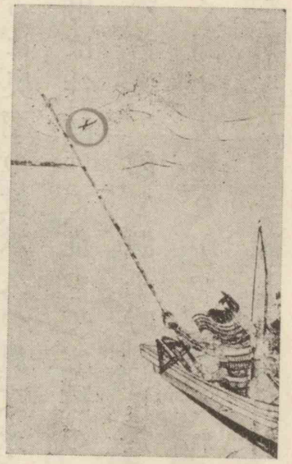
鳩に寓生


目結

公家の家紋は武家に比して早く開けたのであるが、その發達は、却つて武家に比べて後れたのである。殊に鎌倉幕府創立以後、公家は次第に政權に遠ざかつたのみならず、その家紋は輿車・馬具等にのみ用ひられたに拘らず、足利時代以後に至つては、その輿車を用ひることも亦廢れたので、從つて公家に關する家紋の記事は殆ど跡を記錄に絕つたのである。これに反して、武家の家紋は、旗及び幕に用ひられ、時人の視聽に觸れることが次第に多くなり、加ふるに奥羽の役、承久の亂、文永・弘安の國難等が相繼いで起り、旗幕の用は益〻開けて、從つて家紋の用は一般に流布することとなつたのである。即ち源平時代に於て、武士の家紋を用ひたものは、未だ多く聞く所がなかつたが、それが承久の頃になると、既に家々の家紋を据ゑた旗を飜したことが見えてゐる。さうして、當時この家紋を用ひたものは、鎌倉武士ばかりではなく、西國の武士も亦侔しく

元弘・建武
後醍醐天皇の御宇。

家紋を用ひたものであつて、これ等の事實は、蒙古襲來繪巻に據つて、九州の豪族がいづれも家紋を据ゑた旗を掲げてゐるのを見ても、容易に知ることができるのである。



蒙古襲來繪巻

元弘・建武の頃より、吉野朝の頃になると、天下の諸豪は一般に家紋を用ひることとなつた。皇室の御紋章たる菊・桐も、鎌倉時代より既に用ひられたのであるが、當時はこれを私紋として衣服・器財にのみ据ゑられて、公の場合には日月の御紋を用ひられたのである。然るに、吉野朝の頃に至ると、これを御紋章として用ひ給ひ、有功の將士には、時としてこれを下賜せられた。足利氏が菊桐の紋を用ひたのも、後醍醐天皇からこれを拜領したものであると傳へられてゐる。

永祿四年
正親町天皇の御宇。

元和
後水尾天皇の御宇。

戰國時代に至り、群雄割據して兼併を事とするに及んで、地方に於ける諸家の紋章を知ることは、主將としてその統率上必要な事であつたので、稀には武將にして、その地方豪族の家紋を蒐錄せしめたのもあつた。上杉伯爵家に傳へてある關東幕注文の如きは、永祿四年上杉謙信の蒐錄せしめたものであつて、その範圍は、上野・下野を中心として、武藏・安房・上總・下總・常陸に及び、二百五十一家の紋章を收めてある。當時に於ける關東北部諸豪の家紋は、これに依つて略〻窺ふことができるのである。

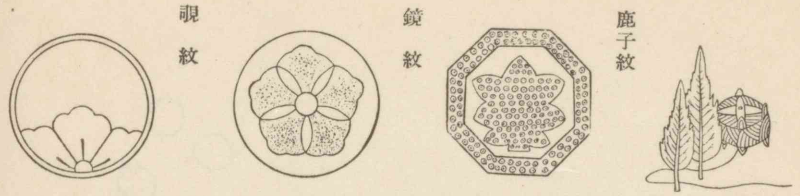
應仁の頃、旗の外に幟を用ひることが始り、以後家紋の用は愈〻その範圍を廣めることとなつた。然るに、德川時代に至り、元和以降、兵革が全く收つたので、旗幟・馬標の如きは、その必要がなくなつた。從つて、紋章の用途も革つて、これより紋章は主として威儀を正すために用ひられることとなつたのである。殊に參勤交替の制が

定つてからは、諸大名が江戸に往來する場合、若しくは登城する場合に、その苗字を表す必要からして、その服裝には、束帶の外は必ず家紋を据ゑたのである。さうして、この頃は家格・門地によつて禮儀作法が異なつたから、途上で遭遇の場合には、豫め紋章を知つて置く必要があつたので、その從士中には、必ず諸大名の家紋を熟知してゐるものを備へて、その遭遇する諸大名の何人であるかを知つて、これに對する禮儀作法に失體のないやうに注意したものである。殊に幕府にては、これがために下座見役を大手門に居らせて、家紋若しくは槍印を見て、登城する所の諸大名の何人であるかを豫知せしめたものである。

從來家紋は、主として旗幕に据ゑられたのであるが、戰國時代の末、豐臣秀吉が聚樂第・大阪城・伏見城を經營するに及んで、これに菊・桐の紋章を据ゑたので、これより建築物に家紋を据ゑることが流

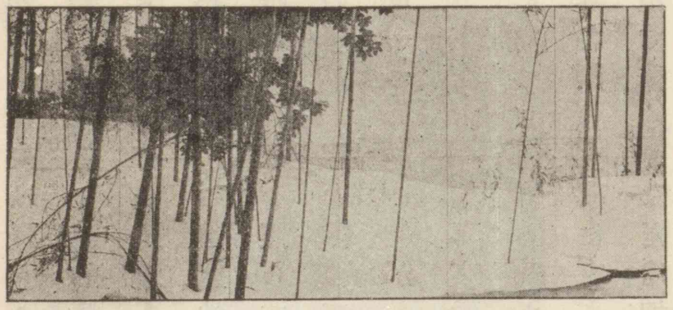
行し、徳川時代に、江戸を始め、諸大名の居城には、大率その家紋を据ゑることが行はれた。また戰國時代より素襖肩衣の服制が起り、これにも亦紋を据ゑることになり、諸大名旗本の士は、通常禮服として裃を用ひ、これに三つ所・五つ所の如く位置を定めて家紋を据ゑたので、紋章の形狀は大率對稱的のものとなり、從つて丸を附けることがこの時代に入つて一般に行はれることとなつて、これがために紋章に一段の進歩を來したのである。

元和・偃武以後、太平の續くにつれて、奢侈の風が行はれ、中にも衣服は殊に華美を盡くし、從來苗字の目標であると共に、威儀を整へるために用ひられた家紋は、この頃からして、主として裝飾に用ひられる傾向を生じ、或は從來用ひ來つた家紋を廢して、新たに優美な紋章を作つてこれに代へることなどが行はれるやうになつたのである。



以上は大名・旗本に就いてのことであるが、普通の人民に至つては更にこれより甚だしかつたのである。即ち伊達紋・加賀紋・鹿子紋・鏡紋・比翼紋・覗紋・扇紋等の起つたのもこの時代からである。かゝる事情であつたので、この時代の家紋は、全く苗字の目標である性質を失つて、優美を競ひ、技巧を衒ふ一種の裝飾用となつた。王政維新以後、泰西の風俗を模倣した結果、洋服が行はれて、家紋の使用は次第に衰へるやうになつたが、輓近に至り、國民の通常禮服は、白襟黒紋附を用ひることとなつたので、幾分か紋章を重んずるやうになつて來た。併し、なほ徳川時代の餘弊を受けて、その目的は殆ど裝飾に止り、徒らに優美を衒つて、擅にこれを改廢するやうな傾向があるのは、時勢の然らしむる所とはいひながら、歎かはしいことである。（日本紋章學）

芳賀矢一　文學博士。國文學者。福井市の人。昭和二年歿、年六十一。


寒月（木島櫻谷筆）

五 月雪花

芳賀矢一

煌々たる活動の日の光西に沈めば玲瓏たる一輪の月休息の夜を照らす。月の光は温和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一度出れば群陰皆影を伏して、大小の有象無象は悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤貧富の差別を失はせてしまふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴なはない清涼の光である、皎潔・無垢・崇美と稱ふべき優しい光である。休息・

うちむかふ云々
荷田蒼生子の歌。

安靜の夜には最もふさはしい此の光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として湧く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人種でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱國の椰子の陰、寒地の氷の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照らす月光の人の胸懷に浸みわたることは、恰も其の影が千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「うちむかふ月は一つのかげながら、うかぶは千々の思ひなりけり。」である。

東西古今、悲喜・哀歡の情熱は、幾萬回となく幾億回となく、此の光に向つて訴へられた。之を嗟歎し之を吟詠した詩歌の感吟は、世界各國の文學に充ち滿ちて居る。天文學者はいふ「月は地球の衛星で、全く死んだ冷塊である。」と。此の冷たい光が古往今來どれほどの暖かみを人間に與へたか、また現に與へつゝあるか。月は永久に人間の友である。

花ならば云々
新續古今集、僧仙覺の歌。

三千世界云々
唐の詩人白樂天の句。

廣寒宮
月の中にあるといふ宮殿。

雪は月よりも一層冷たい。貧富貴賤の差別なく、其の純潔な色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。「花ならば咲かぬ梢もまじらましなべて雪降るみ吉野の山。」といふやうに、眼に入るもの悉く其の下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來る此の純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感じられるのである。霏々と散り紛々と飛んで、たゞ一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、瞬くうちに瓊

雪見（大坪正義筆）

玉を敷く莊嚴な觀は、眞に人目を眩せしめる。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花・紅葉いろ／＼な眺はもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物が此の銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙變化の奇、造化の巧を盡くしたものではないか。一年中蓮の花の咲いて居る極樂淨土は、決して我等の世界ほど樂しいものではなからう。

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪はたゞ一色である。花のさま／＼、どれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり咲きみだれるのは、人生としては餘りに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に芳しい匂さへ持つて居る。我等の食用の爲に作つ

花

花をし見れば云々 「年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし。」（古今集、藤原良房）

た菜や大根の花でも、無限な詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培はれる花に價を生じたのは無理はないが、山の花、野の花、いづれも月・雪と同じやうに一文錢を要せぬのも嬉しい。人生に花なくんばどれほど寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の内にも、床の間に一輪の花は必要である。是は寧ろ花を貴んで其の濫用を愼んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。月・雪の眺は其の皎潔を愛し其の清淨を貴ぶが、花は其の艶麗・華美を以て人生を飾り人心を慰める。花やぐ、花やか、花々し、華美・華麗・華奢などの語は皆花に基づいたものである。古今東西の詩歌は擧げるだけ愚かである。余はたゞ「花をし見れば物思ひもなし。」といふ古歌を以てすべてを總括し得べしと信ずる。

月・雪・花三つの眺には各其の特長がある。いづれを前いづれを後といふ事は出來ぬ。

やまざくら云々 新古今集、康資王の母の歌。

冬ながら云々 古今集、清原深養父の歌。

笠は重し云々 謠曲「葛城」の句。

やまざくら花の下風吹きにけり
　木のもとごとの雪のむらぎえ

是は花を雪に譬へたのである。

冬ながら空より花の散りくるは
　雲のあなたは春にやあるらん

是は雪を花に譬へたのである。

笠は重し呉山の雪、鞋は芳し楚地の花。肩上の笠には無影（むやう）の月を傾け、檐頭の柴には不香（ふきやう）の花を手折る。

是は雪を月と花とに譬へたのである。

花を賞して月を愛せぬ人はない。月・花を愛して雪を賞でぬ人もない。

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖される極北の國では、氷は卽ち人の家である。此の地方の人

世々を經て云々　伊藤仁齋の歌。

年々歳々云々　唐の劉廷芝の「白頭ヲ悲シム翁ニ代ル。」の詩中の句。

には寸紅の目を樂しましめるものもない。また之に反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀を見た事がない。ガス電燈の光に不夜城の觀を呈して夜更を知らぬ繁華なロンドンの住民も、秋・冬の半年は美しい月の光を見る事が出來ない。我等日本人が昔も今も此の三つの眺を擅にする事を得るのは眞に天與の幸福ではあるまいか。

月・雪・花の眺は古人の歴史が加はつて一層の感興が增す。「世々を經てながめし人の數にまた我をもゆるせ秋の夜の月。」月は古來の歴史を照らす鏡である。「年々歳々花相似。歳々年々人不同。」人生の感は花を見て益々繁く雪を見て愈々多い。二千六百年來、月・雪・花三つの眺を有し得た我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に與へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。

（月雪花）

遲塚麗水　名は金太郎。文章家。靜岡縣の人。明治元年生。

ケーナリ　アフリカの西北海にあるカナリー島が原產地だといふ

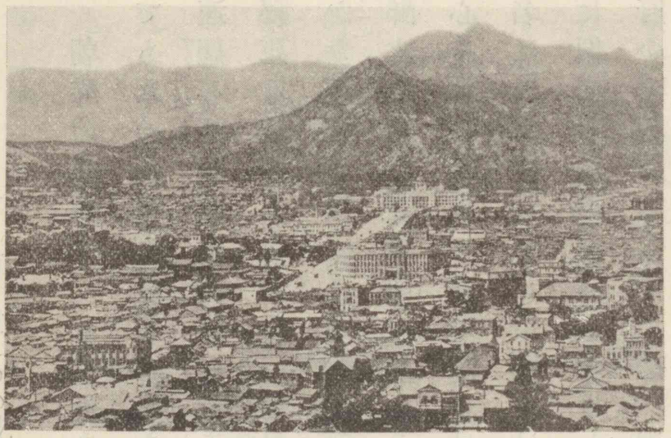
六 朝鮮の四季

遲塚麗水

朝鮮の春は、李の花でもなく、杏の花でもなく、梨の花でも、桃の花でもなく、無論櫻の花でもない。朗らかに明るい欝金の花をもつ連翹こそは、げに朝鮮の春を象徴する花である。京城なる李王家祕苑はいふまでもなく、通邑大都の門巷籬落、そこに黃金の色麗らかな連翹の盈々たる細條、輕く軟風に吹き靡いて、嫩き春の光に陶醉するやうな風情に見えることによつて、始めて春が來たといふ心を催させる。この國ではこの花を迎春花といふ。正しくその名にふさはしい。俗間ではケーナリと呼ぶ、その花の色が金絲雀に似てゐるので、しか呼ばれてゐるのであらう。金絲雀は德川幕府の頃朝鮮の信使が携へ還つたものである。土俗、この花と葉とを胡麻油に漬けて、腫瘡や毒蟲にさゝれた時に、塗抹して奇效があ

三十餘年前云々
明治二十七年。

ると傳へてゐる。



京城

朝鮮の夏は正に白楊（ポプラ）の夏である。水村山郭、處として丈け高き白楊の、薫風に嘯嗷してゐるのを見ないことはない。枝に鵲の巣を藏してゐるなどは、詩趣あり又畫趣ありといふべきである。私の始めて朝鮮に渡航したのは、三十餘年前、征清役に從軍した時である。何處へ行つても童山禿丘絶えて樹らしい樹に逢着することはなかつたが、今來て見れば、到る處翠阜蒼丘、扶疎たる松の林さへ、その樹の既に拱するに餘りあるを見る。その白楊の殊に

多き事は、この樹の成育、他の木に比すれば最も速かに、五年にして

朝鮮の農家

屋根の垂木となすに足り、十年にして棟梁となすに堪ふるに見て、併合當初の有司は特にこの木の栽植を奬勵したものであらうと思はれる。

秋の朝鮮は、正に蕃椒の秋と云ふべきである。金風郊墟に入るの時、一度城外におとづれると、村家の草葺屋根の上、殷紅、火よりもあかいこの蕃椒の一面に並べ乾されてあるを見る。支那人が韮、大蒜を嗜むが如く、朝鮮の人は更に尤も蕃椒を嗜む。料理にも香の物にも、この物なければ旨しとしない。落日、山

にあり、反照雲を爛らす時、水村山郭、一様農家の屋根に乾されたこの蕃椒の紅酣し、硃燃ゆるの光景は、誠に綺麗な眺である。　内地には昔、この物なく、この物あるは豐公の征韓役後より始るといふ。正しく出征の武士が、その種子を燧石袋の中に收めて持還つたものであらう。　されば之れを唐辛といひ、更に又高麗胡椒ともいふ。昔、内地の飛脚が深雪のうちを行く時、この物を足袋のうちに入れて凍傷を防いだといふくらゐ、烈寒の地に生を寄せてゐる人たちは、この物を食うて寒氣を攘ふといふ自然の要求から、その嗜好を成したのであらうと思はれる。

明治節時分になると麥酒が凍つて罎が破裂するといふほど寒威の猛烈な朝鮮には、冬を象徴する何物をも持たないことは心寂しい。　强ひてこれありとすれば、彼の溫突（オンドル）である。　李王家の宮殿は勿論、庶民の家にも必ずあつて、冬眠の人に煦々の春を輸すのである。　家の床はすべて泥土で築造される。　その床を作らうとする當初から、螺線型に又山路形に、若しくは巴様に、三升形に、古來からの傳統や、自家の多年經驗し來つた工夫の施設のもとに、遍く床の面に溫氣の行き亙る樣に竇道を設け、竇道の一端は、壁外の煙突に通じ、他の一端は土間に据ゑた竈の奥に連結させて置くのである。　されば日夕炊爨するその火氣は、煙と共に榮螺の殼のごとき竇道を傳つて土床を溫め、やがて屋外の煙突より放散されるのである。　床には煙の室内に漏れ出づるを防ぐ爲に紙をもつて目張をなし、その上に朝鮮油團を敷く。　庶民の多くは褥も敷かず固き床の上に胡坐し、奇寒膚に砭するやうな冬の夜にも、一枚の煎餅蒲團、薄い小夜具の一襲を被りて、臥するのみである。　移住の内地人は、多くは煖爐又はペーチカを置いて防寒の用意をなせど、中にはやはり朝鮮風の溫突室も造つてゐる。　京城その他都會の内地人

ペーチカ
ロシヤ式の煖爐。

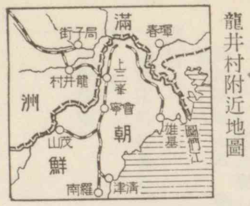
志賀矧川 名は重昂。地理學者。文筆に長ず。三河國岡崎の人。昭和二年歿、年六十五。

神仙爐

向きの貸家は、その一室には必ず溫突の設備があるやうになつたといふ。東京でも、曾て亡友志賀矧川氏が、佐々木の邸の一室を溫突式となし、年の暮、その溫突開きの當夜、知人數輩を招いて朝鮮料理を饗應したことがある。私も亦招かれた客の一人であつたが、折からの微雪、窓邊の竹に洒いで、寒さの殊に酷だしい宵ではあつたが、坐間には唯喫煙用の煙草盃があるのみで、絕えて火氣のなかつたに拘らず、和やかな溫氣は危坐の膝を煖めて、人をして覺えず睡を催さしむる美慵を感じた。さてくさ〴〵の料理の出た後、最後の神仙爐を圍んだ時には、溫か過ぎて、額に薄汗のにじみ出づるを覺えた程であつた。文筆に携はる人の讀書述作の室か、若しくは閑時閑客と面晤する閑房としては、誠に妙といふべきであるが、邦人の習慣より言へば、溫突室には久しく居るべからざるものであらうと思ふ。朝鮮の人の懶惰の習性は、或はこの溫突あるが爲

二百五十韓里 約九十八粁。

龍井村附近地圖



兀良哈 明初の頃遼東に侵入して來た部族の名。こゝでは古その部族のゐた土地のこと。

であらう。私は曾て平壤大戰を觀ての歸途、黃州から南首陽山を踰えて海州より汽船、仁川に歸つたことがある。當時年少、二百五十韓里を一日半を以て踏破した。夜中、銀波の河を徒渉し、とある河畔の客舍を叩き、水に濡れた服をも脫がず、行旅の朝鮮の人達が雜然として枕藉してゐる溫突の室に入つて、夜の明くる間の小睡を取つたが、やがて惡夢に魘はれたやうに驚き覺めると、さながら新たに蒸甑の中より出でたる甘藷の如く、白氣濛々として滿身より立昇り、流汗、膚に遍く堪ふべからざるの奇痒を覺えた。傍に臥してゐた朝鮮の人たちも立騷ぐこの物音に夢を破られ、眼を睜りて訝り眺めてゐるも道理こそ、濡れた衣服は溫突の熱氣に蒸されてかくの始末となつたのであつた。今年の春の旅行にも、會寧より圖們江を渡りて龍井村を訪づれた時、春とはいへど胡沙吹く風のまだ寒い古兀良哈（オランカイ）旅館の主人の親切から溫突の室に幾夜を過

したが、厚衾襲ねての夜半の夢は、吾が家に居る時のやうに圓かならず、襲ねた衾をはねのけて、僅かに一枚の小夜具を被つて辛うじて眠ることを得たこともある。しかも夜明けて後の心地は、何となく濛朧として、頭の岑々と痛むを覺えたのを見れば、溫突はたしかに邦人の習性には適したものではあるまいと思ふ。さりながら、私は朝鮮の春と夏と秋とを知つて、未だ冬を知らない。寒威の酷しい朝鮮の、しかも彼の土壁、草屋、隙もる風の刀のごとき民家にあつては、この溫突あつて始めて寒き夜を凍えずに過され得ることであらう。

太平記 四十卷。作者未詳。花園天皇の文保二年(一三一八)から後村上天皇の正平二十二年(一三六七)に至る凡そ五十年間の軍記物語。

大塔宮 後醍醐天皇の第三皇子護良親王。延曆寺の大塔に居られたので大塔宮といふ。建武二年(一三三五)足利直義の爲に弑せらる。御年二十八。

般若寺 奈良市外にある。

主上 後醍醐帝。

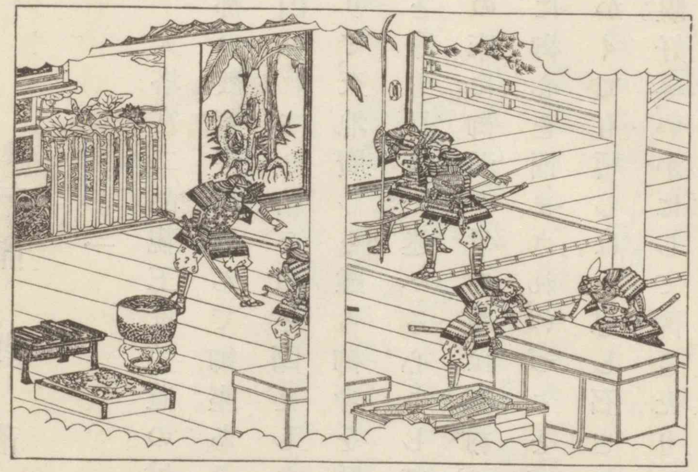
一乘院 奈良興福寺の北にあつた同寺の末寺の一。

七 熊野落

太平記

一

大塔宮二品親王は笠置の城の安否の聞し召されん爲に、暫く南都の般若寺に忍んで御座ありけるが、笠置の城すでに落ちて、主上囚はれさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐れ御身の上に迫りて、天地廣しと雖も御身を隱さるべき所なし。日月明らかなりと雖も長夜に迷へる心ちして、晝は野原の草に隱れて、露に臥す鶉の床に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻にたゝずみて、人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづことても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはと思し召されけるところに、一乘院の候人按察法眼好專、いかにして聞きたりけん、五百餘騎を率して、未明に般若寺へぞ寄せたりける。



大塔宮危難を免れ給ふ

をりふし宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、隙間もなく兵すでに寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべき方もなし。「さらばよし自害せん。」と思し召してすでにおしはだ脱がせ給ひたりけるが、「事かなはざらん期に臨んで腹を切らんことはいと易かるべし。もしやと隠れて見ばや。」と思し召しかへして、佛殿の方を御覧ずるに、人の讀みかけて置きたる大般

若の唐櫃（からうど）三つあり、二つの櫃はいまだ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋をあけたる櫃の中へ、御身を縮めて伏させ給ひ、その上に御經をひきかづきて隱形（をんぎやう）の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し捜し出されなば、やがて突き立てんと思し召して、氷の如くなる刀をぬいて御腹にさし當て、「兵こゝにこそ。」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るもなほ淺かるべし。

さるほどに兵、佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも殘る所なく捜しけるが、餘りに索めかねて「これ體のものこそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開いて御經を取出し、底を飜して見けれども、おはせず。「蓋あきたる櫃は見る迄もなし。」とて、兵皆寺中を出で去りぬ。宮は不思議の御命をつがせ給ひ、夢に道行く心ちして、なほ櫃の中におはしけるが、若し

玄弉三藏 支那唐代の高僧。印度に入り、大部の經文を持歸り、又それを漢譯した。（西紀六〇〇―六六四）。

摩利支天 菩薩の名。

十六善神 大般若經の守護神。

熊野 紀伊國（和歌山縣）牟婁郡をひろく熊野といふ。

赤松律師 則村の第三子。延曆寺の律師。初め護良親王に從ひ、後尊氏の謀叛に與した。

村上彦四郎 義光。信濃國（長野縣）の人。元弘三年吉野城の陷らうとする時大塔宮の身代になつた。

また兵の立歸り委しく捜すこともやあらんずらんと御思案ありて、やがて前に兵の捜し見たりつる櫃に入りかはらせ給ひてぞおはしける。

案の如く、兵どもまた佛殿に立歸り、「前に蓋のあきたるを見ざりつるがおぼつかなし。」とて、御經を皆うち移して見けるが、からからと打笑ひて、「大般若の櫃の中をよくよく捜したれば、大塔の宮はいらせ給はで、大唐の玄弉三藏こそおはしけれ。」と戲れければ、兵皆一同に笑ひて、門外へぞ出でにける。これ偏に摩利支天の冥應、または十六善神の擁護による命なりと信心肝に銘じ、感涙御袖を潤せり。

かくては南都邊の御隱所(おんかくれが)もかなひ難ければ、則ち般若寺を御出であつて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊・赤松律師則祐(そくゆう)・木寺相模・岡本三河坊・武藏坊・村上彦四郎・片岡八

柿の衣 赤色で無紋の衣。

郎・矢田彦七・平賀三郎彼此以上九人なり。宮をはじめ奉りて、御供のものまでも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾(ときん)眉半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

二

この君もとより龍樓鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる踏皮(たび)・脚巾(はゞき)・草鞋を召して、少しもくたびれたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、おこたらせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勤修(ごんじゆ)を積める先達も、見咎むることなかりけり。

由良の湊 紀伊國（和歌山縣）日高郡にもあるが、こゝは淡路國（兵庫縣）津名郡。和歌山對岸の港。
藤代 紀伊國（和歌山縣）海草郡にある。
和歌 紀伊國（和歌山縣）海草郡和歌の浦。
吹上・玉津島 共に同所附近。
切目の王子 切目王子社。日高郡にある。

びんづら

由良の湊を見わたせば、沖漕ぐ舟の梶を絶え、浦の濱ゆふいく重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀の路の遠山渺々と、薄紫や藤代の、松にかゝれる磯の浪、和歌・吹上をよそに見て、月に磨ける玉津島、光も今はさらでだに、長汀・曲浦の旅の路、心を砕くならひなるに、雨を含める孤村の樹、夕べを送る遠寺の鐘、哀れをもよほす時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

その夜は叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗に測られたり。夜もすがらの禮拜に、御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、暫く御まどろみありける御夢に、びんづら結ひたる童子

熊野三山 紀伊國東牟婁郡。三山は本宮・新宮・那智。
十津川 大和國（奈良縣）吉野郡。熊野川の上流。
兩所權現 本宮と新宮。

大塔宮（磯田長秋筆）

一人來て、「熊野三山の間はなほも人の心不和にして大義成りがたし。これより十津川の方へ御わたり候ひて、時の到らんを御待ち候へかし。兩所權現より案內者に附けまゐらせられて候へば、御道(みち)指南仕るべく候。」と申すと御覽ぜられて、御夢は卽ち覺めにけり。これ權現の御告げなりけりと、たのもしく思し召されければ、未明に御よろこびの奉幣をささげ、やがて十津川をたづねてぞ分け入らせ給ひける。

その道のほど三十餘里が間には、絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に

枕をそばだて、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に濁を忍びて、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なうして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を經させ給へば、御身もくたびれはてて流るゝ汗水の如く、御足は缺け損じて草鞋皆血に染まれり。御供の人々もその身鐵石にあらざれば、皆饑ゑ疲れて、はかぐ\しくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に、十津川にぞ着かせ給ひける。

田山花袋　名は錄彌。小說家。群馬縣の人。昭和五年歿、年六十。

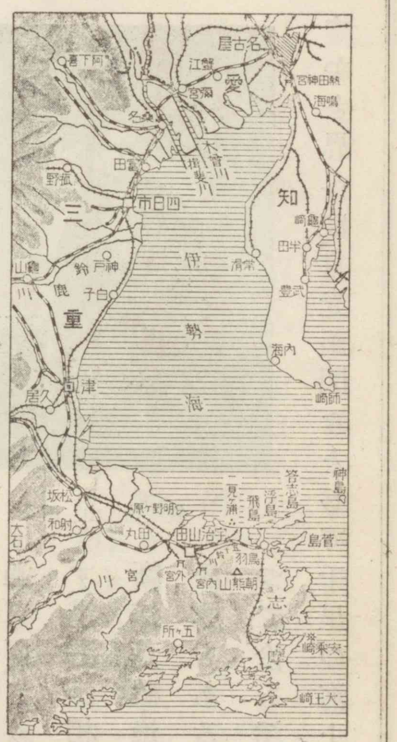
八　伊勢・志摩の海

田山花袋

南歐の風光、地中海の大觀を見馴れた西洋人でも、日本の海岸美には一驚を喫せずには居られないさうだ。その日本の沿海の美、その美の最も遺憾なく發揮されて居る處は決して少くあるまいが、自分の見た中では、伊勢の海からかけて志摩・紀伊の沿岸に如く處はない。優美に傾かず、凄涼に過ぎず、さりとて甚だ平凡に陷らず、港灣が相接し、島嶼が相連なり、斷江・荒磯・漁村・蜑戶・燈臺もあれば松原もある。海水が深く陸に入つて、恰も溪流のやうな入江をなすかと思へば、月光が閃々として千里の海上を照らし、斜に欹つた

田山花袋

伊良湖村　一端は伊良湖岬となり、尾張國の知多半島の師崎と相對してゐる。



一帆の片影の遠く雲外に消える光景など、殆ど應接に遑がないというてもよい。

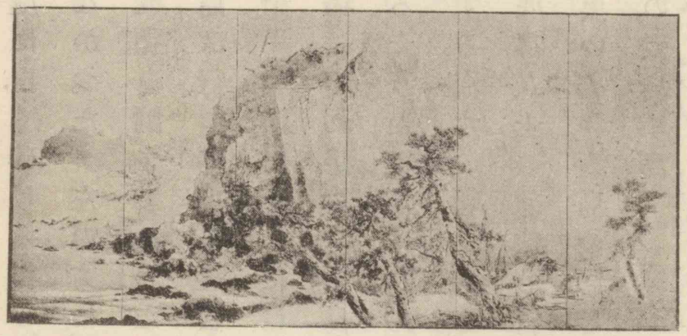
伊勢・志摩の海！　いかに變化に富み、明暗に富み、空想に富んで居ることだらう。自分は嘗て三河國の最南端、渥美郡の一角、伊良湖村の絶端にある古山といふ山の上に立つて、一眸の下に伊勢・志摩の海を見渡したことがあつた。夏だつたが、日は一時間ほど前に遠く向ふに打渡された伊勢朝熊連山の陰に落ちて、一時美しく西の空を彩つてゐた種々の形や種々の色の面白い夕べの雲も、いつ消えて行くともなく消え果てて、もう薄暗い夕暮の光が、何處ともなく暗碧の波の上に寄せてゐた。

見渡すかぎり、舟といふ舟、帆といふ帆は一つもなく、たゞ海の處處に白く碎ける波の頭が見えるばかりで、その淋しさといつたらなかつた。　左の方に、海上一里ばかりを隔てて神島が見える。丁度甕を倒さまにしたやうなので、一名甕島ともいふさうだが、この島は行つて見るとなか〱風情に富んで居る。西の山陰に五六十戸の漁村、そこには桂光院といふ寺、その寺の一室を借りた村役場。それからその島を廻つて東に行くと、怒濤が天を呑まうとするやうな絶海に臨んで、絶大な洞窟の奇觀、滿潮毎にその中に呑吐する海水の響は、恰も巨人が天に向つて叫ぶやうで、その壯觀は到底都人士の想像し得るところでない。神島の少し右方に當つて黒い〱大島の影、それは志摩の答志島だ。菅島・飛島、その他無數の大島・小島。

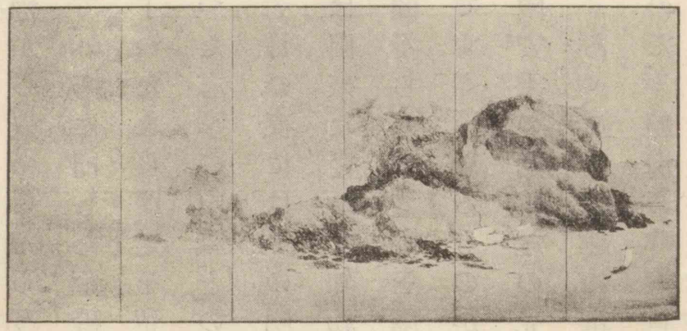
日は漸く暮れて、海の色は愈〻黒く、その上に浮かぶ島々の影も微

かに星の瞬、遠海の囁、遠山の姿、自分は深い深い空想に耽つた。「平和！人の世の平和とは抑、何ぞや。」自分はかう叫んだ。平和を望む心、平和を欲する念、遂にこれおのれの弱きを表白して居るではあるまいか。

見よ、この自然を。見よ、この大觀を。海は四方から來て陸を呑まうとし、陸はこれを拒ぐべく全力を盡くして居るではないか。島・岩・岸、此等は皆陸の遺して以て海の怒濤を拒がせるものではあるまいか。けれども、海は時の永久の力を藉りて、次第に陸を侵蝕し、島を崩し、岩を碎き、岸を陷れて、漸次陸の運命を縮めつゝあるのではあるまい



志摩の海



（田南岳璋筆）

か。

「戰鬪！」と自分は叫んだ。實際この伊勢の海の大觀に接すると、誰でも戰鬪といふ感を起さずには居られまい。水と陸と波と山とが、いかにも互に刃を交へて居るやうに配置されて、伊勢の内海はまるで海水に攻め落されたやう。その海門を守る諸島の影は、孤城落日の狀態に陷りつゝ、なほ陸のために節を守つて奮鬪して居るやうに思はれるのだ。

若し人が、自分が空想に耽つたやうに、その古山の一角に立つて、薄暮の影の四方に滿ち渡るのも知らずにゐたならば、千鳥の

淋しげに鳴く聲が、歌のやうにその耳を掠めるので、覺えずその恍惚から覺めるだらう。 その時は、影の低いばら〳〵松の間を過ぎて、外海に面した荒磯の方へ辿り行くがよい。そして、松原を出て了つたならば、足を留めて神島とその向ふに遠く微かに連なり渡つた志摩の山脈との間を見るがよい。

月の夜には、その明らかな光に紛れて、それと分明に見出すことは出來ないかも知れないが、闇の夜には、物凄い波の上に、大凡一分間ぐらゐづつ間を隔てて、線香花火のやうにぴかつと光つて、そしてすぐ消えるものがあるだらう。何だと思ふ。燈明崎——志摩國安乘の廻轉燈の光だ。

あゝ、この詩趣に富んだ燈臺、自分は殆ど想像するにも堪へないのだ。絶海の畔、漁村を距たること數町、磯馴松が風に吹かれて、皆面白く斜に捻れて居る半島の絶端懸崖千丈、暴風雨の荒れる夜な

どは、怒濤の響、松の響、海の鳴る響、風雨の吼える響、それらの凄じい力に殆ど燈臺が吹き飛ばされて了ひはしないだらうかと疑はれるばかりのその燈臺に、若い空想がちな青年、さうでなければ、年老いて世の荒波に漂ひ果てた老爺、それが、靜かに穩やかに、世の中ではとても見ることの出來ない悠揚たる態度で、海に惱む船人のために、その夜每々々の勤を怠らない淋しい生活。 どんなに空想に乏しい人でも、これを見ては必ずさま〳〵の想像を起さずには居られまい。

（草枕・旅すがた）

伊良子清白
名は暉造。醫師。詩人。鳥取縣の人。明治十年生。

九 安乘(あのり)の稚兒

伊良子清白

志摩の果(はて)安乘の小村、
はやて風岩をどよもし、
柳道木木を根こじて、
靈空(みそら)飛ぶ斷(ちぎ)れの細葉。

水底の泥を逆上げ、
かきにごす海の病(いたつき)、
そそり立つ波の大鋸(のこ)、
よげとこそ船を待つらめ。

とある家(や)に飯蒸(いひむ)せかへり、
男(を)もあらず女(め)も出で行きて、
稚兒ひとり小籠に坐り、
ほほゑみて海に對(むか)へり。

荒壁の小家一村、
反響(こだま)する心と心、
稚兒ひとり恐怖を知らず、
ほほゑみて海に對へり。

いみじくも貴き景色、
今もなほ胸にぞ跳る。
少(わか)くして人と行きたる
志摩の果安乘の小村。

（孔雀船）

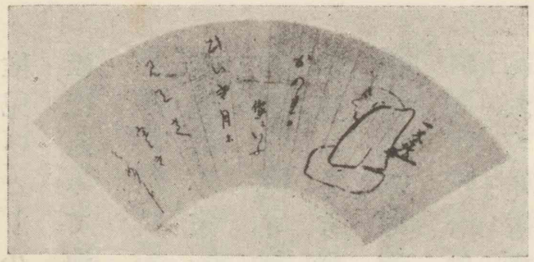
小林一茶　通稱は彌太郎。信濃國（長野縣）の人。俳人。文政十年(二四八七)歿、年六十五。

竹植うる日　五月十三日のこと。支那でこの日竹を移植すれば枯れないといふ。

一〇　をさな兒

小林一茶

こぞの夏、竹植うる日の頃、うき節しげきうき世に生まれたる娘、物に敏かれとて名を「さと」と呼ぶ。ことし誕生日祝ふ頃ほひなり、てうち〳〵、あはゝ、天窓(あたま)てん〳〵、かぶり〳〵ふりながら、同じき子供の風車といふもの持てるを頻りにほしがりてむづかれば、とみに取らせけるに、やがてむしやむしやしやぶつて捨て、つゆほどの執念なく、直ちに外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめり〳〵むしるに、「よくした〳〵。」と褒むれば、誠と思ひけらく〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。



一茶筆蹟

心のうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、なかなかに心の皺も伸しぬ。

また人の來りて「わん〳〵はどこに。」といへば犬に指さし、「かあかあは。」と問へば烏に指さすさま、口元より爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、春の初草に胡蝶の戲るゝよりも優しくなん覺ゆる。

折から門に月さしていと涼しく、外に童の踊の聲のすれば、直ちに物投げ棄てて片ゐざりにゐざり出でて、聲を揚げ手眞似して嬉しげなるを見るにつけ、いつしか彼をも振分髮のたけになして踊らせたらんには、二十五菩薩の管絃よりも遙かに勝りて興あるわざならんと、我が身に積る老を忘れて、憂さをなん晴らしける。

かく日すがら小鹿の角のつかの間も手足を動かさずといふことなくて遊び疲るればにや、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり、母は飯炊ぎ、そこら掃きかたづけて、やがて閨に泣聲のする

二十五菩薩　阿彌陀佛の命をうけ念佛の行者を迎へて極樂に往生させるといふ二十五の菩薩。

を目の覺むる合圖と定め、手かしこくも抱き起して、乳房あてがへば、すは〳〵と吸ひながら、胸板のあたりを打敲きて、にこ〳〵笑顔をつくるに、母は長き胎内の苦しみも、日々の襁褓の穢はしきも打忘れて掌の中の玉と撫でさすりて、一人喜ぶなりけり。

蚤のあとかぞへながらに添乳かな　　（おらが春）

二　一茶を語る

相馬御風

小林一茶が江戸漂泊時代に、夏目成美の家を訪ねた折の出來事だとして、こんな逸話が語り傳へられてゐる。

その頃、俳人としての一茶の名聲は、もうかなり高くなつてゐたが、生活の窮乏狀態は依然として舊の如くであつた。彼が夏目成美と親しく交つてゐたのも、無論一方に、俳人としての成美に對す

相馬御風　名は昌治。文學者。新潟縣の人。明治十六年生。

夏目成美　俳人。文化十三年歿。

る尊敬の念からであつたらうけれども、他面、その人の生活上の豐かさと、よく他人の面倒を見てくれた深切さとに引かされてゐたからでもあつたに違ひない。夏目成美は通稱井筒屋八郎右衛門といつて、淺草藏前の札差であつた。

一茶は窮する時は、時々成美の家を訪ねて助を乞うたり、時には食客となつたりした。或日、一茶が成美の家を訪ねた時のことであつた。彼は先づ勸められて入浴をした。恐らく例によつてその時も、顏までも垢だらけになつてゐて、それが成美には堪へられなかつたからでもあつたらう。ところが、湯から上つて來た一茶の顏を一目見ると、成美はじめ家人達は驚いた。まるでそれは赤・青・黃・紫等のさま〳〵の繪具で彩りでもしたやうに、さま〳〵の色の斑點が顏一面に出來てゐた。

「どうしたといふものだね、お前さんのその顏は。まるで五色の

藏前　今の東京市淺草區にある。

札差　江戸時代、旗本・御家人の家祿たる廩米の受取方及びその賣買等を請負ふ商人。

繪具を塗りたくつたやうになつてゐる。」

こんな風に成美は可笑しさを堪へ〳〵訊ねた。

一茶も流石にそれには驚いたやうであつたが、やがて何か思ひ當ることがあつたらしく、急にきまり惡さうな樣子をして答へた。

「實は手拭が無いものだから、持合はせの風呂敷で拭きました。それでその色が落ちたのでせう。」

いかにもその通りであつた。よく見ると、それは正しく安染物の色でも落ちてにじんだに違ひない色合であつた。それには成美も轉げんばかりに笑はされた。當の一茶も流石に笑はずにはゐられなかつた。そして暫くは主客は手を拍つて笑を共にした。

こんな馬鹿げた事が、果して眞に有つたかどうかは分らぬ。或は後人の附會した話であるかも知れぬ。しかし、私にはこの話は如何にも一茶といふ人にはふさはしい話のやうな氣がするのである。そして、野人一茶のその場合の五色の顏を想像して、私は妙に涙ぐましい可笑しさといつたやうな、一種異樣な氣持にさへ誘はれるのである。

小林一茶

或年、加賀侯が江戸參覲の折、柏原の本陣中村家に宿つた。そして、豫て一茶の俳名を聞いてゐたので、名主嘉左衞門に命じて彼を招かせた。名主は非常に喜んだ。これはひとり一茶生涯の面目であるばかりでなく、一鄕の譽であり、又自分の名譽でもあると思つたからである。それで早速一茶の許へ驅けつけていつた。

「一茶どん、大變なことになつたわい。今日な、加賀の殿樣が御本

柏原　長野縣上水內郡柏原村。

陣にお泊りなされてのお言葉に、この驛に一茶といふ有名な俳諧師がある筈ぢやが、わしは是非ともその仁に遇ひたく思ふから、どうぞ招いてくれとのことぢや。何にいたせ百萬石の御城主の御用ぢや。そなたも嬉しからうが、わしも嬉しうてならぬわい。一刻も早う仕度をしてまゐらつしやれ。」

しかし、意外にも一茶はそれを聞いて冷やかに笑つた。そして、

「馬鹿をいはつしやい。風流の道に御用なんかあつてたまるものか。若し風流に對して御用があらば、百萬石の殿様だらうが將軍だらうが、俺の方では一切面會御無用ぢや。どうぞさう傳へてくだされ。」

かう言下に斥けてしまつた。

名主は驚いた。また怒りもした。しかし、この場合一茶のいふがまゝに、殿様への謁を斷ることは彼にとつては不可能のことで

あつた。そこで心ならずも、彼は更に言葉を和らげて、一茶の前に頼み入つた。

「いや、御用などといつたのは俺の粗忽からで、殿様の方では決してそのやうな御心で仰せられたのではない。何よりも風流の道にかけてのそなたの偉いことを御存じの上で、是非そなたと風流についての物語をしたいと仰せられるのぢや。それほどまでに風流の道を好まれる殿様のことぢやから、そなたもどうか機嫌を直して伺候するやうにしてくだされ。」

そこで一茶も、不承々々名主に同行して加賀侯の前に出ることにした。しかし、彼にはこれといふ禮服が無かつたので、十徳だけは着たものの、着物は相變らずの襤褸着物、手足は例の通り垢だらけのまゝであつた。それを見た名主は「これではいかぬ。」とは心で思つたものの、そんな事をいつて、又一茶の機嫌を損ねてはなら

ぬと、そのまゝ連れて行つた。けれども、その途中たゞ一言だけ、彼は一茶に注意することを忘れなかつた。

「一茶どん、こんな事をいふと、又そなたに叱られるかも知れぬが、どうか殿樣の前では、言葉だけは少しは愼んでくだされ。そして、少しはお世辭もいふやうに賴みますぞ。」

しかし、いよ〳〵加賀侯の面前に出た時には、一茶はもうそんなことは忘れてゐた。そして四邊人無きが如き態度で、滔々と俳諧の道を論じ立てた。特に彼は力を入れて、所謂殿樣藝や旦那藝といふやうなものの、俳諧の本道を誤る罪を指摘して、その妄を難じたといはれてゐる。けれども、流石に風流の道に心を寄せることの深かつた殿樣だけに、一時は氣持を損ねたらしくも見えたが、結局一茶のさうした率直と純眞と素朴とを寧ろ大いに喜んで、一茶が退出しようとするに際して、時服二領を取らせさへしたといふことである。

ところで、その場合更に可笑しかつたことは、一茶が一旦座を辭してから、突然何か思ひついたやうに後戻りして、

「いや、大事なことを忘れた。名主どんが折角あれほど氣をつけてくれた、あのお世辭をいふのを忘れた。」

かう獨り語しながら、取つてつけたやうに、平身低頭をしたことであつた。これには、名主も赤面措くところを知らなかつた。とのことである。

なほ、その折貰つて歸つた二領の時服を、一茶は歸宅後、何の頓着もなく捨てて顧みなかつたとも傳へられてゐる。

更に又、他の場合に、一茶が加賀侯に謁した時のこと、

御免なり將棊の駒も箱の内

といふ句を奉つたところ、侯には、どうしてもその句意が分らなか

つたので、それを訊ねられると、一茶はそれを説明して、

「将棊の駒は盤面にある時は、皆それ〴〵の格式もあり、道もあるが、一旦盤面を離れて箱の内に納められるに於ては、王將も歩兵も凡てその格式を失ふものである。これ世間道と風流道との相違である。」といふやうなことをいつたといふ逸話もあるとのことである。

これらの逸話は、果してどの程度まで信を置くに足るものであるか分らぬが、何れも、時人の觀た一茶の性格なり行狀なりの一面の眞を傳へてゐることだけは、疑ふことは出來なからうと思ふ。

そして、それは豪快とか放膽とかいふ言葉で許し去るよりも、寧ろ詩人として、若しくは藝術家としての一茶の見識が、あれほど貧に苦しんでゐた彼をして、なほ且、しかく強からしめ清からしめるに十分であつたと觀た方が、一層意味深く思はれるのである。

三十九歳の時に、一茶の書いた「父終焉記」に現れた彼の美しい孝心には、私は讀む度に泣かされる。これは彼が永年の放浪の後に、一は錦を故郷に飾るべく、一は父への永々の無沙汰の罪を詫びるべく歸郷した折も折、重患に罹つて一月の患ひの後に死んで行つた父を看護した、その間の日記であるが、その中には、全く世にも稀なといひたいほどの孝心が溢れてゐる。

この文章は、後年彼が自分の子の可愛さを敍したり、愛兒の死の悲しみを訴へたりした文章と共に、純情の人としての一茶の美しさを遺憾なく傳へてゐる貴重な記錄である。

洒脫ばかりが決して一茶の全面目ではなかつたのである。

（鄕土に語る）

正岡子規 名は常規。俳人。歌人。松山市の人。明治三十五年歿、年三十六。

高濱虛子 名は清。小說家。俳人。松山市の人。明治七年生。

内藤鳴雪 名は素行。俳人。松山市の人。大正十五年歿、年八十。

一三 時雨

正岡子規

春風に尾をひろげたる孔雀かな

背戸あけて家鴨呼びこむ時雨かな

高濱虛子

遠山に日のあたりたる枯野かな

桐一葉日當りながら落ちにけり

内藤鳴雪

元日や一系の天子富士の山

馬方の馬にものいふ夜寒かな

河東碧梧桐 名は秉五郎。俳人。松山市の人。明治五年生。

荻原井泉水 名は藤吉。俳人。東京市の人。明治十七年生。

沼波瓊音 名は武夫。俳人。名古屋市の人。昭和二年歿、年五十一。

河東碧梧桐

蜻蛉や西日靜かに稻莚

畑打の四五人よりし時雨かな

荻原井泉水

牡丹の花びらをゑがく餘念なや

月にぢつと顏照られ月見る

沼波瓊音

西瓜太郎躍り出でよと割つてけり

吹雪やんで月落葉松の上に出づ

高濱虚子 七六頁頭註參照。

あまの原云々 安倍仲麿の歌（古今集）。安倍仲麿—中務大輔船守の子。靈龜元年（一三七五）遣唐留學生。在唐五十餘年。寶龜元年（一四三〇）歿、年七十。

一三 俳句に就いて

高濱虚子

俳句は十七字の詩であるといふことは解りきつたことのやうであるが、私はこゝに改めて「俳句は十七字の詩である。」といふ事を、第一にはつきり言つて置く。

和歌は千數百年の歴史をもつ短い詩である。この和歌から連歌が起り連歌から俳諧となり、俳諧から俳句が生まれて來た。この變遷は、少くとも、百年・二百年の年月を經て成つたものであるが、畢竟、俳句は和歌の上の句が獨立して出來たものである。隨つて、和歌では五七五七七の調であるが、俳句は五七五の調である。

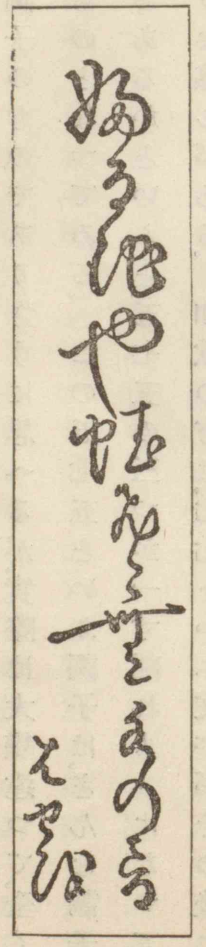
この和歌の五七五七七といふ調子は、或感じを縷々として述べるに適してゐる。たとへば、

あまの原ふりさけ見れば春日なる

芭蕉 姓は松尾。名は宗房。別號桃青。俳人。伊賀國（三重縣）の人。元祿七年（二三五四）歿、年五十一。

三笠の山に出でし月かも

といふ歌の如きは、たゞ月に對し、海原遠く離れた故山を偲ぶものであるが、かく三十一字になつて見ると、如何にも遣るせない情緒が綿々として出てゐるやうな感じがする。これは五七五七七の調子が、自然に縷々としてその感じを述べるに適してゐるからである。ところが、俳句になると、



芭蕉筆蹟

古池や蛙飛びこむ水の音

といふやうに、和歌では下の句として缺くことの出來ない七七の文字が省かれて、單に五七五といふ調子であるから、大いに面目を

改めて、ぼく〳〵した調子になつて來る。上に述べたやうに、俳句も和歌の上の句だけを取つたものであるから、やはり和歌のやうな調子のものでありさうに思へるが、實際は大變違つて、全く別種のものとなつてゐる。　この五七五といふ調子は、どんな調子のものであるかといふと、五七五の三つが一寸離れ〳〵になつてゐるやうな感じがある。　和歌の方は、七七といふ文字がその後にあるがために、全體の調子が伸びやかになつて、渾然として一つに溶け合つてゐるのであるが、その七七の文字が無くなつて、單に五七五だけになると、その五と七と五とが各〻獨立して、別々のものとなつて行かうとする傾向がある。　これが和歌と俳句との大變な相違となるのである。

卽ち、この古池の句にしても、先づ「古池や」といふ五字で、讀者に古池の景色を想像させ、次に「蛙飛びこむ水の音」といふ十二字で「蛙の

飛び込む水音がするぞと、第二段の想像をさせるといふ順序になつて來る。　換言すれば、古池の句の場合は、初の五字だけが獨立してゐて、あとの七と五とは連なつてゐるのである。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふやうな句になると、五と七と五と皆離れ〳〵になつてゐる。この句意は後に述べよう。

和歌は「テニヲハ」の文學といつてもよい程に、「テニヲハ」をやかましくいふが、これもやはり、綿々として盡きぬ情を歌ふに適した文學だからである。　然るに、俳句では「テニヲハ」は勿論、說明的な言葉は出來るだけ省略し「や」とか「かな」とかいふ特別の助辭を使用する。隨つて「テニヲハ」には重きを置かない。　この俳句の調子から來る特色が、情を述べるのにはどうも不適當なのである。

この情を述べるに幾分でも不適當な文學である俳句の使命は、

然らば何であるかと言へば、それは景色を描くといふ點にある。恰も繪畫のやうに、景色を言葉で、文字で、描くのである。

元來、文學は言葉で出來てゐるもので、言葉は時間的のものであるから、感じを順々に歌つて行くとか、又は事件を順々に述べて行くとかいふのには適してゐる。長い小說のやうなものでも、短い和歌のやうなものでも、或事件の推移を寫すとか、或感じを述べるとかいふ性質のものである。それが畫であると、目に見る或瞬間の景色を畫面に描き現すものであつて、時間的でなくて、全く空間的のものである。然るに、俳句は意外にも、——私は「意外にも」といふ——繪畫に近いものとして存在してゐる。

併しながら、景色を描くといつても、文學であるから繪畫とは全然同一にはならないが、大體に於て、文學本來の性質たる時間的變化を描くに適しないで、空間的描寫に適してゐると言へようと思

ふ。これは五七五といふ調子と、切り詰めた短い詩形とから起つた當然な結果で、これがやがて一方に大なる特色を形造つてゐるのである。尤も、かういへばとて、俳句も文學である以上、勿論、感じとか事件とかを述べてはならぬと言ふのではなく、又古來さうした俳句は全く無いなどといふのでもない。

又、俳句には「季題」といつて、春夏秋冬の季を述べなければならぬ事になつてゐるが、これは景色を描く上には當然の要求である。何故なれば、四季を超越した景色といふものは、全然この世界には存在しないからである。次に、實際の句に就いて說明を二三試みよう。これは極端な例であるが、

　　女郎花腰黑茶碗髯奴

といふのである。これはどんな意味かといふと、女郎花が咲いてゐる、その側で髯の生えた奴が腰黑茶碗で飯を食つてゐるといふ

のである。これは前にも述べたやうに、五七五の調子から自然に離れ〳〵になつてゐるのである。即ち、女郎花・腰黒茶碗・髯奴と、別別に離して述べてあるので、たゞ我々が心の中でその離れ〳〵になつてゐる物に連絡をつけて、女郎花が咲いてゐる側で、髯奴が腰黒茶碗で飯を食つてゐる樣子を思ひ浮かべるのである。これは繪畫にすれば、女郎花と腰黒茶碗と髯奴との三つの別々な物が、一畫面に描き現されてゐる譯になる。同じやうな極端な例であるが、前に擧げた芭蕉の句、

奈良七重七堂伽藍八重櫻

といふのは、奈良は古の都であつて、「奈良七重」は、人家が澤山立並んで賑やかであつたといふことをいひ、「七堂伽藍」は、立派なお寺の大きなのがあり、そして「八重櫻」は、奈良は八重櫻の名所であるから、櫻の盛りの奈良といふ事を現した句である。この句はどうかとい

名月や云々
炭太祇の句。炭太祇は江戸の人。俳人。明和八年(二四三一)歿、年六十三。

ふと、一寸とりとめのつかないやうな句らしく考へられるが、我々は勝手に想像して、一幅の古い奈良の畫を描き出すのである。これらの句は共に極端な例であるが、次は、

名月や舟なき磯の岩傳ひ

といふ句に就いて考へて見よう。こゝに「名月や」といふのは、空に名月がかゞやき渡つてゐるといふので、「舟なき磯」は、舟が一艘も見えない磯といふのであり、「岩傳ひ」は、その磯の岩の上を人が傳うて歩いて行くといふのである。これにも言葉が大變に省略されてゐる。私は前に和歌は「テニヲハ」の文學であると言つたが、俳句では「テニヲハ」のみならず、その他の色々な言葉も省略される。髯奴の句も、たゞ名詞をつゞけたばかりであり、奈良の句も、名詞ばかりである。岩傳ひの句はどうかといふと、何も別にいつてはゐないが、月の好い晩に岩傳ひに人が歩いて行き、舟は一艘もなくて淋し

蕪村　與謝氏。名は寅。俳人。攝津國（大阪府）の人。天明三年(二四四三)歿、年六十八。

い、といふことが想像される。して見ると、この句に於ても、「テニヲハ」のみならず、如何にも多くの言葉が略され、簡略になつてゐるのが解る。このやうに、景色を描くといふ點に於ては繪畫と同じやうであるが、俳句の方には、岩傳ひに歩いて行くといふやうな時間的なことも吟じ得るが、畫の方にはそれが全く出來ない。

蕪村の句に、

水鳥や舟に菜を洗ふ女あり

蕪村筆

といふのがある。これは、水鳥が浮いてゐると、舟の中で女が菜葉を洗つてゐる景である。京都の賀茂川などには、よく菜を洗つてゐる女を見受けるが、場所は何處と限らない。舟で女が菜を洗つてゐる。菜を洗つてゐる女に特別に何の關係があるといふのでもなしに、水鳥が浮いてゐる、といふ景色で、全く繪畫と同じであり、卽ち、舟に菜を洗ふ女と水鳥とで、近景と遠景とを描いてゐるのである。

かういふ風に、俳句は和歌の上の句から獨立した十七字から成つたものであるが、それが十七字になつて今日に到る迄に、十七字の詩として獨立する必要上、和歌の範圍を脱して、別に景色を描くといふ一つの大きな特色を成したのである。然もこれは偶然に成つたのではなく、五七五といふ調子から來た當然の結果である。

（講演筆記）

山内素行　國文學者。明治大學講師。東京市の人。明治八年生。

宗鑑　山崎氏。連歌師。天文二十二年(二二一三)歿、年八十九。

宗因　本名西山豐一。肥後國（熊本縣）の人。俳人。天和二年(二三四二)歿、年七十八。

知足　下郷氏。芭蕉の門人。尾張の人。寶永元年(二三六四)歿、年六十六。

一四　川柳と女性

山内素行

川柳は最も通俗な文學であつて、俳句と形を同じうする滑稽的短詩である。俳句にも滑稽諧謔な作がないではない。

寒くとも火になあたりそ雪佛　宗鑑

風寒し破障子のかみな月　同

鴨の足は流れもあへぬ紅葉かな　宗因

猿ひきは猿の小袖をきぬたかな　芭蕉

とんぼうの顔はおほかた目玉かな　知足

これ等の俳句は、一見しては川柳と何等の差違がないやうな觀がある。しかし、俳句には春夏秋冬の「季」といふことがあるが、川柳にはかういふ制限は更にない。かやうに俳句には「季」といふものを入れることにきめてあるから、その作は自然に多く景物を題目とするが、川柳はおほかた人事を主題とするのである。

寶暦　桃園天皇の御代(二四一一—二四二三)。

寛政　光格天皇の御代(二四四九—二四六〇)。

柄井川柳　名は正通。俗稱八右衞門。江戸の人。寛政二年(二四五〇)歿、年七十三。

柄井川柳

川柳は前句附から出た。即ち七七などの句を、前句とし、これに五七五の句を附ける一種の文學的遊戯から起つたものである。七七などの前句は、單に附句を作る題、もしくはその方針を示すに過ぎないものであつたから、終には五七五の附句が獨立するやうになつて、こゝに川柳といふものが生じたのである。川柳といふのは、寶暦より寛政に亙つて前句附の作者の泰斗と仰がれた柄井川柳の號であるが、その評點を川柳點といひ、これが略せられて川柳といふ作句の名となつたのである。この柄井川柳は寶暦七年の頃から「萬句合」といつて、年々前句を定めて募集した投吟の中の勝句を印刷して公にして來たが、明和四年に至つて、更にその中から獨立して意味をなすものを拔萃した小册子を發行するに至つた。これが即ち謂はゆる

俳風柳多留(やなぎだる)である。

川柳の特色は着想の奇拔なのと、描寫の極めて露骨な點にある。各種の階級の人物の弱點を摘發し、嗤笑し、諷刺するのを特色としてゐる。しかし、教訓的な作もあり、優雅な作にも乏しくない。各種の人物の中で飜弄の焦點となつた女性は下女であるが、これは下女の人格などを餘り尊重しなかつた當時にあつては、止むを得ないことであらう。

下女に次いで多く材料にせられたのが嫁である。いふまでもなく嫁とは新婦のことである。

嫁

花嫁は口をつぼみにして笑ひ

花嫁の花に對してつぼみといつたところにおもしろみがあるのである。

みんな顔かくすが嫁のおほ笑

笑ふたび嫁手の甲を口にあて

望まれて嫁一本はめ二本はめ

琴を望まれてやうやう花嫁が恥ぢらひながら、琴爪を指にはめるところである。

連れて來た下女ばか嫁はしかるなり

「ばか」は「ばかり」の意である。

親風を柳にうける嫁の孝

孝に身のやつれ花嫁の美しさ

母親の慈愛も亦川柳の材となることが多い。

うたゝねの薄着へ母のあつい恩

物差で晝寢の蠅を逐つてやり

針仕事をしてゐる母親の樣子が見えるやうである。

よく寝れば寝るとてのぞく枕蚊帳

うたゝねもいつか着てゐる母の慈悲

井戸端へ子の行く夢に母は汗

たゝかれず赤子の顔の蚊の憎さ

添乳してつい洗濯が夢になり

寝てゐても團扇の動く親心

我が子をあふぐ團扇がうつゝに動いてゐるのである。

ゆきたけのあはぬを母はうれしがり

我が子の成長を喜ぶ母親の情である。

二三年縫ひこんでおく母の慾

我が子の着物を仕立てる母親の心である。

内　儀

お内儀が立つてはさみの落ちる音

針仕事のはさみである。

呼ばれても二針三針縫つて立ち

いゝ日和内儀戸板をはづさせる

戸板は張物に用ひるためである。

粉のふいた子を抱いて出る夕涼

あせもの粉薬である。

子　供

飯事の所帯（しよたい）くづしがあまえて來

縫紋を乳を吞み〱むしるなり

母のゑくぼつゝついて乳を吞み

蟲干に小袖着たがる頑是なさ

買ひにやる子に絹絲を五六寸

買つて來る絹絲の見本である。

乳　母

乳母の名は請狀（うけじやう）の時見たばかり

いつも、ばあや〳〵で濟んで行くのである。

さがる乳母晝寢の顔へ暇乞

幼君の晝寢の顔である。

早少女

さをとめは子を寢かすにも田植歌

以上掲げ來つた女性に關する川柳の中には、人を噴飯させるにとゞまる座興的の作もまじつてゐるが、これ等によつて川柳といふ短詩の一斑を知り得ると同時に、古今に通じた女性の面目をも併せて窺ひ得ると信ずる。

吉田絃二郎　本名は源次郎。小說家。早稻田大學講師。佐賀縣の人。明治十九年生。

一五　童心童眼

吉田絃二郎

人間といふ自分自身の姿、自分の心の姿を靜かに見つめるといふことは、私たちの生活にとつて最も大切なことである。大抵の人々は日々夜々の激しい動の爲に、自分自身の心の姿をぢつと見つめる機會といふものを、餘り持ち得ないやうである。またそのやうな機會を持たうと心がけてゐないやうである。

今日では殆ど繪の上のありふれた構圖になつてゐるが、古い傑れた作品のうちに、私たちはよく一羽の白鷺が水のほとりにつくねんと佇んで、自分の姿を水に映して眺め入つてゐるのを見る。繪畫上の單なる構圖としても面白い古雅な味はひのある形である。限りもなく廣い靜かな水の上には、何一つさへぎるものもない。そこには何もない。空無の世界のみがひろげられてゐる。

その何もない空無の世界の眞中に、たゞ一羽の白鷺のみがぢつと靜かに水の上の一點を凝視してゐる。絶對無の境に置かれた、たゞ考ふるところの一つの存在である。

鷺圖（狩野古信筆）

かう考へてくると一羽の白鷺の圖もなか〳〵味はひのある聯想を與へてくれる。我々個々の人間は一つの考へるところの存在である。絶對無の境に置かれた一羽の白鷺である。あのたゞ一羽の白鷺が水のほとりに佇んでゐる姿には何となしに尊い味

搏—搏

はひがある。と同樣に、たゞ一人靜かに自分の心の姿を見つめてゐる人々の生活にも、尊い味はひがある。歌を詠むこと、俳諧を樂しむこと、繪を書き、音樂を聽くこと、すべての藝術なり、哲學なりを味はふといふことも、畢竟は靜かに自分の心の姿を見つめたいが爲である。

たとへば一叢の蘭の葉を描くとする。墨の濃淡・筆の勢にもその刹那の自分自身の心の姿があらはれてくる。お茶を立てるとする。一碗の茶の味はひの中にも自分の心の影がはつきりと映つてくる。ピアノの前に腰をおろして鍵を打つ。たゞ一つの音にも自分の心臟の脈搏が傳はつてくる。自分の心が曇つてゐる際にはピアノの音が曇つてくる。

私たちの心には形はない。けれども心の内のひらめきは、いろいろな形となつて外部にあらはれてくる。その外部にあらはれ

ベートーヴェン ドイツの音樂家(西暦一七七〇—一八二七)。

近松門左衞門 巢林子と號す。京阪の淨瑠璃及び狂言作者。享保九年(二三八四)歿、年七十二。

て來たいろ〳〵な尊い形を通して、私たちは人間の心の尊さ、深さ、有難さを想像することが出來る。ベートーヴェンの音樂を聽く時に、或は近松門左衞門の作品を讀む時に、私たちは確かに人間の心の深さについて、嚴肅さについて、高さについて、或は寂しさについて考へざるを得ない。そこには私たち自身の心の姿の深さも、嚴肅さも、哀れさも、尊さもその儘に映し出されてゐる。

人間が生きてゐる意義を人類全體の幸福の爲であるとか、かういつた風にきめてしまふ人がある。確かにさうであるかも知れない。もしそれで滿足出來る人はそれで滿足するがいゝ。けれどもこのやうな人生の見方は動もすれば餘りに大ざつぱな摑み方に墮ち易い。疎雜である。餘りに賴りどころがない感じがする。偉大な人、偉大な宗教家といふやうな人にはそのやうな悟りも出來るであらうが、もと〳〵凡夫下根の身には、そのやうな悟り

はなか〳〵出來さうもない。釋迦のやうなえらい方でも發菩提心の原因は老病死苦の歎きにあつた。老病死苦の歎きはつまり私たち凡夫下根の歎きそのものである。何故に人は老い、人は病み、人は死するかといふ歎きは、私たちを驅つて靜かに人間の運命について考へさせる。人間の心の姿を見つめさせようとする。釋迦の結跏趺坐の苦行は要するに私たちが靜かに自分の心の姿を見つめようとする努力に過ぎない。恐れるが故に生について考へる。また死についても考へる。人間の運命を、人間の心の姿を見つめようとする。菩提の光を求めようとする。死を恐るゝが故に、死を悲しむが故に、私たちは生きてゐるこの現在の有難さを心ゆくまで味はひたいと思ふ。

私たちは生まれた時、一文の値をも拂ふことなくして生まれて來た。

西行　俗名佐藤義清。鳥羽上皇の北面の武士であつたが後出家して西行と號した。歌人。建久元年(一一九〇)歿、年七十三。

石山　滋賀縣滋賀郡石山町にある石山寺。石山寺の秋月は近江八景の一。

合歡の花

象潟　羽後國(秋田縣)由利郡、鳥海山の西北麓にある。

しかも、私たちはそこに値踏みすることの出來ないほど尊い人間の心を惠まれて來た。そこには、また一文の値を拂ふことなしに太陽を惠まれ、微風を、鳥の聲を、雲の色を惠まれ、青空を惠まれてゐる。

人生きてゐる間に私たちは自然によつて惠まれた太陽と、青空と、微風と、鳥の聲と、波の音と、夕燒の空とを貪りつくすほどの心で味はつて見たい。西行といひ芭蕉といひ一生を家もなく送つたのはその爲ではなかつたか。

彼等は家をも土地をも持たなかつた。然し、吉野山の櫻も、石山の月も、鳴立澤も、象潟の合歡の花も、日本國中の山も川も西行のものであり、芭蕉のものであつた。すべてのものを捨てて、天地といふもののふところに一身を委ねてしまつたからである。

私たちは芭蕉や西行のやうに、家を捨てて自分ひとりで歩いて

ゐるわけにはゆかないかも知れぬ。然し心持だけは眞似て見たい。殊に目まぐるしい近代の都會生活を送つてゐる人々にとつては、一層この心がけは必要なことであると思ふ。

數年前である。私は二箇月ばかりいろ／＼忙しい仕事の爲に、夜も晝も追ひまはされてゐたことがあつた。ある秋の夜であつた。私はそのころ勤めてゐたある場所から、夜ひとりで暗い夜更けの町を歩いて來た。私はふと崖を見上げた。そこには無數の星が闌干としてさゝやいてゐるのであつた。

私はその時、あゝ空があつた、星があつた、といふことを今更のやうに感じたのであつた。

花を愛することの出來ない人間は俗人である。一株の木を愛することの出來ない人、小鳥の鳴く音に心をすますことの出來ない人も俗人である。あの黑い冷たい何のかざりもない塊の中か

ら、可憐な一莖の花が咲いて出るといふこと、たゞそれだけの事實のうちに驚嘆すべきある物があるのではないか。私はどのやうな學者であらうと、宗教家であらうとも、もしその人が夜の空にあこがれることを知らず、一莖の草花に見入ることもせず、一枚の草の葉に驚を感ずることをしなかつたとしたら、さういふ人を尊敬すべきであらうか。この世界に親があり、子があり、妻があり、友人があり、更に雲があり、草の花があり、青い木の葉や、さゝやかな雨の音があるといふだけで、もう私たちの人生は惠まれてゐるのではないか。死ぬことは悲しいが、私たちはこのやうな惠を曾てもち、現在もちつゝありといふことを考へただけでも、生まれて來たことを感謝しなければならぬ。

饒舌な人と半時語つてゐるのは隨分つらいものである。そして何も得るところはない。緣日で買つて來た廉い一鉢の花となら

ば一日對座してゐても飽きはしない。何ともいへぬ心の歡びを見出す。芭蕉は俳談の外、談ずべからずといつた。私たちは出來るだけ沈默を守つてゐたいと思ふ。そしてもつと〳〵親切な眼で人生を自然を觀たいと思ふ。おしやべりをしてゐる間は心は眠つてゐる。

哲學といひ、宗教といひ、文藝といひ、つまり親切な眼で人生なり自然なりを觀るといふことに他ならぬのである。

私はこのごろ庭の山茶花が疲れて來たので、郊外の麥畑へ賴んで植ゑかへてもらつた。麥畑へ行つて山茶花を見ると驚いた。幹も葉も眞黑である。今まで庭前に置いてゐる間は山茶花の幹が、自然の色を失つてゐることに氣付かなかつたのである。私たち都會生活者の心もまたこの山茶花のやうに煤にけがされてゐるところがないか。

私たちの嗜好や趣味は不健全になつてはゐ

ないか。

田舍に住んでゐる少年たちは山の水のうまさを知つてゐる。土の香りの懷かしさを知つてゐる。私たちは都會に住んでゐるが爲に、人工的ないろ〳〵な刺戟はもつてゐるが、山の水のうまさも、土の香りの懷かしさも、山の空氣の感觸も忘れてしまつてゐる。不具の生活に生きてゐるが故に不具の刺戟を求めてゐる。

私は庭に雀のお宿をこしらへてゐるが、今ちやうど子雀が巣立つたところなので、每日米をたべに子雀が集つてくる。大きな雀はとかく人を疑ふので、二三粒たべて飛んで行つてしまふから、大きな雀だけではなか〳〵米は減らない。子雀はまだ人を疑ふことを知らないので米を入れた笊の中へ四五羽づつはひりきりになつてたべてゐる。この子雀の何ものをも疑ふことを知らぬ風を見てゐると、實にいゝ心持である。

私たちの生活にも曾てはあんな時代があつた筈である。あゝいつた世界がどうか私たちの社會にもとりもどされなければならぬ。

私たち自身の生活からあの雀の素直な心をとりもどす必要がある。童のやうに悲しいことを悲しみ、嬉しいことを嬉しがり、憤ることを憤る人間が一番尊いのである。信じなければならぬものを信ずることが大事である。私たちはこの心を一番多く失つてゐるやうに思ふ。

童の素直な心で人を思ひ、童の素直な眼でものを見るといふことが、藝術にもすべての人事にも一番大切であると思ふ。

（わが詩わが旅）

北原白秋
名は隆吉。詩人。歌人。福岡縣の人。明治十八年生。

一六 少女の歌

北原白秋

しののめの、われは野ばらよ、
すがすがし、にほひをさなし。
咲けよ、この少女（をとめ）ごころ、
かぎりなきやさしまごころ。

岩のまの、われは泉よ、
すがすがし、いのちつつまし。
祕めよ、この少女ごころ、
しみいづるふかきまごころ。

しらかばの、われは林よ、
すがすがし、ひびきあたらし、
守れ、この少女ごころ、
世に染（そ）まぬきよきまごころ。

夜の空の、われは昴（すばる）よ、
すがすがし、ひとみうるはし、
燃えよ、この少女ごころ、
みどりなす星のまごころ。

（青年日本の歌）

生田春月
詩人。鳥取縣の人。昭和五年歿、年三十九。

一七 靜かな友達

生田春月

ぢつと對ひ合つて、何も語ることとてもないので、いつまでもいつまでも默つてゐる。それでゐて、互の心の中は、丁度自分の心と同じやうに、よく解つてゐる。一つの眼つき、一つの微笑でその心持を現すには十分なのだ。

こんな友達があつたなら、どんなに幸福なことであらう。互に信じ合ひ、互に愛し合つて、一點の疑ひもその間に介在しない友達が一人でもあれば、私達は二重に人生を生きることが出來るのだ。たゞ自分ばかりでなく、友達によつても生きることが出來るのだ。

善い友達であることは、善い父であり、善い子であり、善い兄弟であるよりも、一層困難な事であると同じく、一層重要な事でもある。善い父や兄弟である事は、なほ努めずしてもあり得られようが、善

い友であることは十人の中七八人までが、生まれながらにしてはあり得られない。大抵の人がそれには品性の錬磨、人格の淨化を必要とするのである。

隣人の愛とか人間愛とかいふ事は、まづ友達の愛から始められなければならない。眞に友達を愛する事が出來れば、愛の世界の鍵は已に握られたのである。

友達を得るのは、主として運である。

どんなにいゝ友達になれる人が、此の世の何處かに在つても、一生遭逢しないでしまへばそれまでである。またどんないゝ友達になり得た人でも、他の偶然な理由から、互に理解し合ふまでに至らないで別れてしまふ場合もある。甚だしい場合には、最もいゝ友達となり得られた人達が、或外面的な事情のために、例へば黨派的偏見だとか、階級の懸隔だとかのために、最も烈しい敵となつてゐ

る事さへ尠くはないと思ふ。

友達運のいゝ人は眞に幸福な人である。財産を惠まれるよりも、名譽を惠まれるよりも、いゝ友達を惠まれた方が、本當の人間らしい人間にとつては感謝すべき幸運なのである。

本當の友達、本當に互に許し合へる心友は、一生の中一人か二人、多くても三四人とはあるまい。その少數の友達でも得られたなら、それは非常な幸福と喜ばねばならない。大抵は知人に過ぎないものだ。

若い時には友達は容易に出來る。けれどもそれがいつまでも續く友達となる事は、極めて稀である。大抵はいつともなく疎遠になり、去るもの日に疎しの例に洩れず、相見ることの少くなると共に、相思ふこともまた少くなるものだ。

けれども、それさへ友情の終りとしてはいゝ方に屬する。もつとわるい場合になると、昨日までの友達が、今日は最も激烈な敵となる場合が世の中には非常に多いのである。

「己に如かざるものを友とする勿れ。」とは、聖人の教である。また「彼が何人であるかを知るには、彼の友を見よ。」といふ事も云はれてゐる。

友達は何等かの點で相通ずるものがあつて、始めて結びつくことが出來る。どんな點から云つても、共通點もなければ、聊かの理解もないものは、知人ではあり得ても友達ではあり得ないのだ。

私達は「彼の友達である。」といふ事を、誇を以て考へもし、言ひもする事の出來る友達を持たねばならぬ。さうした友達を惠んでくれるやうに運命に祈らねばならぬ。

シャンフォールは「友達に三通りある。自分を愛してくれる友達、自分を何とも思つてゐない友達、自分を憎んでゐる友達とである。」

去るもの日に疎し　「去ル者ハ日ニ疎シ、來ル者ハ日ニ以テ親シ。」（文選）

己に如かざるものを友とする勿れ　論語の學而篇と子罕篇とにある語。

聖人　孔子をさす。

シャンフォール　フランスの文學者（西紀一七四一―一七九四）。

リヒテンベルグ　ドイツの哲學者（西紀一七四二—一七九九）。

と云つた。そしてリヒテンベルグも「まことに然り。」と、それに強く同感してゐる。私達もかうした三通りの友達をその近邊に擧げることが出來るであらう。

自分を憎んでゐる友達とは、早晩別れてしまはねばならない。こんな友達は或時期が來ると、假面を脱して敵として立向ふやうになる。彼はたゞ假面をかぶつた敵にすぎないのだ。

自分を何とも思つてゐない友達は、そんな事もなく、いつまでも微温的に交際は續くが、それは嚴密な意味からは、勿論友達などと呼ぶべきものではあるまい。

眞の友達は唯自分を信じてくれ、自分を愛してくれる友達である。

併し、それは單に自分を信じ、自分を愛してくれるばかりでなく、また自分が信じ、自分が愛してゐる友達でなくてはならない。

ニイチエ　ドイツの哲學者（西紀一八四四—一九〇〇）。

自分が信じ愛することの出來ぬ人は、終に友達ではあり得ないのだ。

人間の一生は友達を失ふ過程のやうなものだ。三十歳といふ年にもなると、若い時分の友達とはだん〳〵疎遠になる。ニイチエが云つた「別れの時」を、私達は屢〻經過しなければならない。「別れの時」はどんな幸福な人でも、一生のうち絶對に一度も通過しないですますわけには行かない。

その境遇が異なり、その意見が異なり、そのめざす方向が異なると共に、どうしても避けるわけには行かなくなる。私達は餘りに屢〻古い友達と別れなければならない運命の下に置かれる。

然らば、汝の「別れの時」をして意義あらしめよ。

舊い殼を脱することの出來ない蛇は死ぬ。人は時來れば舊衣を脱して、新粧しなければならない。そこで舊い時代と共に、その

時の友達に自然別れなければならなくなる事もあらう。

併し、友達に別れるのは、汝の進歩であらしめよ。汝が餘りに高く登つたために孤獨になるのはいゝ。友達よりも低く下るのであつてはならない。

友達は屢、苦い裏切と裏切られとに終る。その人を愛してをればをる程、その裏切は私達の胸を刺し貫く。併し一考せよ、私達はいつも裏切られてばかりゐるだらうか。

私達が若し友達に裏切られ、背かれたと感じて、憤を發するやうな事があつたなら、自分は果して彼を裏切らなかつたか、彼に背かなかつたかと、自分に訊ねてみるがよい、自分は果して彼にいゝ友達であつたらうかと。

そして假令彼に對しては、いゝ友達であつたとしても、彼の外の誰かに私達は曾て背いたり裏切つたりしたことはなかつたであ

らうかと。

私達は他人を責めるばかりでなしに、また自分をも反省してみたいと思ふ。

別れた友を思ふのは、過去の自分を思ふのである。過去を愛惜する心切なれば、別れた友を愛惜するの情なきを得ない。併し、それは別れねばならなかつたのであつた。故なくして別れたのではなかつた。たゞ、その別れが清らかなものでありたい。再び顏を合はせられないやうなものであつてはならない。優しい懷かしさを以て、古い友達を回想できるのは、何たる幸福であらう。然らば汝は友を失つたのではなかつた。

私は今多くの古い友達について考へる。昔の友達を憶ふのは、恰も自分の青春の墓を見るやうな思ひがする。

私は自分の懷かしい愛する友達を死の手に奪はれた。また歳

ゲーテ ドイツの大詩人（西紀一七四九—一八三二）。

月のために空しく隔てられてしまつた。

また第三者の悪意ある讒訴のために、親しい間を裂かれてしまつた事もある。それは止むを得ない事だ。自づと眞實の現れるまで、堪へ忍んで待つ外はない。そしてその友達が再びその親しみに還つて來た日は、新しい友達を得たよりも更に樂しい事である。

かくて今私に殘された友達は、實に長い年月によつてふるひ殘された最も信頼のできる惠まれた友達である。

かうして私は一層古い友達を愛するのである。

「人はその理解しないものを所有しない。」と、ゲーテは云つてゐる。友情は所有し所有せられることである。

理解のないところに、友情は成立する筈がない。

たゞ高貴なる精神のみが友情を解するとは、誰の言葉であつたか。

友情の中に自分の生命の一半を傾倒するものは幸福である。彼はその友情の中に、第二の自己を經驗するであらう。

靜かな友達と今私が呼ぶものは、寧ろ自然と書物とである。自然と書物との中に、私は離れ難い友を見出してゐる。

併し、その故に私は人間の友達を棄てようとは思はない。それは自然と書物との與へてくれないいかに多くのものを私に與へてくれるであらう。

友は幾度か變る。併し、終に變る事のない友もある。友は古きほどよしといふ。併し、一見舊知の如きよき友もある。私をしてよき友のためのよき友であらしめよ。

（旅ゆく一人）

保元物語　三巻。作者不詳。保元の亂の顛末を記した軍記物語。

船岡　今の京都市上京區紫野大徳寺南方にある丘陵。（地圖參照）

一八　乙　若

保元物語

さるほどに内裏よりすなはち義朝を召され藏人右少辨資長朝臣を以て仰せ下されけるは、「汝が弟どもの未だ多くあるなるを、たとひ幼くとも女子のほかは、皆尋ねて失ふべし。」となり。宿所に歸つて秦野次郎を召してのたまひけるは、「あまりに不便なれども、勅諚なれば力なし。母か傅か抱きて、山林に逃げ隱れたらむはいかゞせむ。六條堀河の宿所にある當腹の四人をばすかし出して、船岡にて失へ。」とぞ聞えける。

延景難儀の御使かなと心うく思へども、主命なれば力なし。涙を袖に收めつゝ、泣く〳〵輿を舁かせて、かの宿所へぞ赴きける。母上は折節物詣の間なり。公達は皆おはしけり。兄をば乙若とて十三、次は龜若とて十一、鶴若は九つ、天王は七つなり。此の人々

入道殿　爲義。義朝の父。

守殿　下野守源義朝。

雲林院　船岡の東にある。

羊のあゆみ云々　「譬ヘバ旃陀羅羊ヲ驅ツテ屠所ニ就カシム。歩々死地ニ近ヅク、人命モ亦是クノ如シ。」（摩耶經）

大宮　大宮通り。

は延景を見つけてうれしげにこそありけれ。秦野の次郎「入道殿の御使に參つて候。殿は十七日に比叡山にて御さまをかへさせ給ひて、守殿の御もとへ入らせ給ひしを、世間も未だつゝましとて、北山雲林院と申す處に忍びてわたらせ給ひ候が、公達の御事おぼつかなくおぼしめし候間、御見參に入れ奉らむ爲に、倶し奉つて參らむとて、御迎へにまゐつて候。」と申せば、乙若出であひて「まことに樣かへておはしますとは聞きたれども、軍の後は未だ御姿を見奉らねば、誰も〳〵みな戀しくこそ思ひはべれ。」とて、我先にと輿に爭ひ乘られけるこそあはれなれ。これを冥途の使とも知らずして、各輿どもに向ひつゝ、「急げや急げ。」と進めける。羊のあゆみ近づくを知らざりけるこそはかなけれ。大宮を上りに船岡山へぞ行きたりける。峯より東なる所に輿かきすゑて、いかゞせましと思ふところに、七つになる天王走り出でて「父はいづくにおはし

大殿
源爲義。
八郎御曹司
源爲朝。
四郎左衞門云々
四郎左衞門賴賢。賴仲。爲宗。爲成。九郎爲仲。
下野殿
下野守源義朝。

ますぞ。」と問ひたまへば、延景涙をながして、しばしは物をも申さざりしが、やゝあつて「今は何をか隱し參らすべき。大殿は守殿の御承りにて、きのふの曉斬られさせ給ひ候ひき。御舍弟たちも八郎御曹司の外は、四郎左衞門殿より九郎殿まで五人ながら、よべ此の表に見え候山もとにて斬られ奉り候ひぬ。きむたちをも失ひ申すべきにて候。『相構へてすかし出し參らせて、わびしめ奉らぬやうに。』と仰せつけられ候間、入道殿の御使とは申しはべるなり。おぼしめすこと候はば、延景に仰せ置かせ給ひて、みな念佛候べし。」と申せば、四人の人々これを聞き、みな輿より下り給ふ。九つなる鶴若殿「下野殿へ使を遣して『如何にわれらをば失ひ給ふぞ。四人を助け置き給はば、郎等百騎にもまさりなむずるものを。』此のよし申さばや。」とのたまへば、十一歲になる龜若「まことに今一度人を遣してたしかに聞かばや。」と申されける所に、乙若殿生年十三なるが「あな、心うのものどもの言ひがひなさや。我等が家に生まるゝものは幼けれども心はたけしと申すに、斯く不覺のことをのたまふものかな。世のことわりをもわきまへ、身の行末をも思ひたまはば、六十になりたまふ父の病氣によつて出家遁世してたのみて來り給ふをだに斬るほどの不當人の、ましてわれ〳〵を助け給ふことあらじ。あはれ果敢なき事し給ふ守殿かな。これは淸盛が和纔にてぞあるらむ。多くの弟を失ひはてて、たゞ一人になして後、事のついでに亡さむとぞはからふらむを覺らず、只今わが身も失せ給はむこそ悲しけれ。二三年をも過したまはば幼かりしかども乙若が、船岡にてよくいひしものをと、汝等も思ひ合はせむずるぞとよ。さても下野殿討たれ給ひてのち、忽ちに源氏の世絶えなむこそ口惜しけれ。」とて、三人の弟たちにも「な歎き給ひそ。父も討たれたまひぬ、誰か助けおはしまさむ。兄たちも皆斬られ

内記平太 名は正遠。

給ひぬ。情をもかけ給ふべき守殿は敵なれば、今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。されば命助りたりとも、乞食・流浪の身となりて、こゝかしこにまよひ行かば、『あれこそ爲義入道の子どもよ。』と、人々に指をさゝれむは家の爲にも恥辱なり。父戀しくばたゞ西に向つて南無阿彌陀佛と唱へて西方極樂に往生し、父御前とひとつ蓮に生まれあひ奉らむと思ふべし。」と、おとなしやかにのたまへば、三人の公達おの〳〵西に向つて手をあはせ、禮拜しけるぞあはれなる。これを見て、五十餘人の兵も、みな袖をぞぬらしける。

此の公達に各〻一人づつ傅どもつきたりけり。内記平太は天王殿の傅、吉田次郎は龜若、佐野源八は鶴若、原後藤次は乙若殿の傅なり。さし寄つて髮結ひあげ、汗拭ひなどしけるが、年頃日頃、宮仕へ、朝夕に撫ではだけ奉りて、只今をかぎりと思ひける心どもこそ悲しけれ。されば聲をあげて叫ぶばかりにありけれども、幼き人々

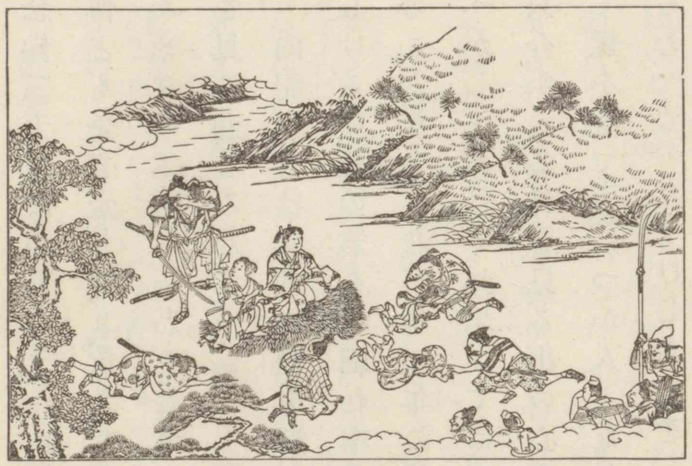
ほかゐ

をなかせじとおさふる袖のひまよりも、あまる涙の色深く、包むけしきもあらはれて、思ひやるさへあはれなり。

乙若、延景に向つて、「われこそ先にと思へども、あれらが、幼心におぢ怖れむも無慚なり。また云ふべきことも侍れば、あれらをさきに立てばや。」とのたまひければ、秦野の次郎太刀を拔いてうしろへ廻りければ、傅ども、「御目を塞がせたまへ。」と申してみなのきにけり。卽ち三人の首まへにぞ落ちにける。乙若これを見給ひて少しも騒がず、「いしう仕りつるものかな。われもさこそ斬られむずらめ。さてあれはいかに。」とのたまへば、ほかゐを持たせてまゐりたり。手づから此の首どもの血のつきたるを押拭ひて、髮かきなで、「あはれ無殘の者どもや。かほどに果報少く生まれけむ。只今死ぬる命より、母御前のきこしめし歎き給はむ其のことを、かねて思ふぞたとへなき。『乙若は命を惜しみてやのちに斬られけ

八幡 男山石清水八幡宮。

む。』と人いはむずらむ。全く其の儀にてはなし。かやうの事をいはむにつけても、またわが斬られむを見むにつけても、留りたる幼き者のまた泣かむも心苦しくていはぬなり。母御前のけさ八幡に詣で給ふに、『われもまゐらむ。』と申せば、『皆まゐらむ。』といふ。『倶せば皆こそ倶せめ、倶せずば一人も倶せじ、かた恨に。』とて、我等が寢たる間に詣でたまひしが、下向にてこそ尋ね給ふらめ。我等かゝるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず形見をも參らせず、只入道殿のよび給ふと聞きつる嬉しさに、急ぎ輿に乘りつるばかりなり。されば、これを形見に奉れ。」とて弟どもの額髮を切りつゝ、我が髮を具して、もし違ひもやせむずるとて、別々に包み分けて、各、其の名を書きつけて、秦野次郎にたびにけり。「又ことばにて申さむずることはよな、『けさ御供に參りなば、遂には斬られ候とも、最後の有樣をば互に見もし見え參らせ候はむず



爲義の兒四人船岡山にて誅せらる

れども、なか〳〵互に心苦しき方も侍らむ。御留守に別れ奉るもひとつの幸にてこそ侍れ。此の十年餘りの間は、かりそめに立ちはなれ參らすることも侍らぬに、最後の時しも御見參に入らねば、さこそ御心に懸り侍るらめ。なれども、かつは八幡の御計らひかとおぼしめして、いたくな歎かせおはしまし候ひそ。親子は一世の契と申せども、來世は必ずひとつ蓮に參りあふやうに御念佛候べし。』とて、「いまはこれらが待遠

なるらむ、とく〱。」とて、三人の死骸の中へわけ入つて、西に向ひ念佛三十遍ばかり申されければ、首は前にぞ落ちにける。四人の傅ども急ぎ走り寄り、首もなき身を抱きつゝ、天に仰ぎ地に伏しておめき叫ぶもことわりなり。まことに涙と血と相和して流るゝを見る悲しみなり。

内記平太は直垂の紐を解きて、天王殿の身を我が膚に當てて申しけるは、「此の君を手馴れ奉りしより後は、一日片時も離れ参らすることなし。我が身の年の積る事をば思はず早く人と成らせ給へかしと、あけくれ思ひてはぐくみ参らせ、月日の如く仰ぎつるに、只今かゝる目を見る事の心うさよ。常は我が膝の上にゐたまひて髭を撫でて、『いつか人となりて、國をも庄をも設けて知らせむずらむ。』とのたまひしものを。うたゝねの寝覺にも、『内記々々。』と呼ぶ御聲耳の底に留り、只今の御姿まぼろしにかげろへば、さらに

忘るべしとも覺えず。これより歸りて命生きたらば千年・萬年を經べきや。死出の山、三途の河をば誰かは介錯申すべき。恐しくおぼしめさむにつけても、まづ我をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らむ。」といひもはてず、腰の刀を拔くまゝに、腹かき切つて失せにける。

恪勤の二人ありけるも、「幼くおはしまししかども、情深くおはしつるものを、今は誰をか主と頼むべき。」とて、刺し違へて、二人ながらに死ににけり。これら六人が志類なしとぞ申しける。同じく死する道なれども、合戰の庭に出でて、主君と共に討死し腹を切るは常の習なれども、かゝる例は未だなしとて、譽めぬ人こそなかりけれ。此の首ども渡すに及ばず、あまりに父を戀しがりければとて、圓覺寺へ送りて入道の墓の傍にぞ埋めける。

義經記　作者未詳。主として義經の事蹟を記したもの。
浮島が原　靜岡縣駿東郡愛鷹山の裾野。
佐殿　源賴朝。
御曹司　源義經。
池の尼　平淸盛の繼母。

一九　浮島が原の對面

義經記

佐殿は善惡に騷がぬ人にておはしけるが、今度は事の外嬉しげにて、「さらばこれへおはしまし候へ。見參せん。」と宣へば、彌太郞やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司、急ぎ參り給ふ。佐殿つく〴〵と御覽じて、まづ淚にぞ咽ばれける。御曹司もそのいろは知らねども、共に淚に咽び給ふ。

互に心のゆくほど泣きて後、佐殿淚を抑へて、「さても頭の殿におくれ奉りて、その後御行方を承り候はず。幼少におはし候時見奉りしばかりなり。賴朝池の尼の宥められしによりて、伊豆の配處にて伊東・北條に守護せられ、心に任せぬ身にて候ひしほどに、奧州へ御下向の由は幽かに承りて候ひしかども、音づれだにも申さずに候。兄弟ありと思し召し忘れ候はで、取敢ず御上り候事、申しつくし難く悅び入り候。これ御覽候へ。かゝる大事をこそ思ひ企て

故左馬頭　源義朝。
八幡殿　源義家。
刑部丞　源義光。

て候へ。八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申し合はする人もなし。平家の討手、上せばやと思へども、身は一人なり。賴朝自身進み候へば、東國覺束なし。代官を上せんとすれば、心やすき兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それも叶ひ難かりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。我等が先祖八幡殿の、後三年の合戰に御弟刑部丞と一つになりて、遂に奧州を從へ給ひけるその時の御心も、賴朝御邊を待ちえ參らせたる心もいかでかこれに勝るべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の恥を雪ぎ

浮島ヶ原

山科 京都市東山區にある。
鞍馬 京都府愛宕郡にある鞍馬寺。

亡魂の憤りを息めん。」と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞ絞られける。これを見て、大名・小名互の心の中推し量られて、皆袖をぞ濡らされける。

暫くありて、御曹司申されけるは「仰せの如く幼少の時御目にかかりて候ひけるやらん。配處へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ參り、十六まで形の如く學問を仕り、かくて京都に候ほどに、内々平家方便をつくる由承り候間、奥州に下向仕りて秀衡を賴み候ひつるが、御謀叛の由承りて、取敢ず馳せ參る。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見參に入り候心地してこそ候へ。命をば故殿にまゐらせ候。身をば君にまゐらする上は、いかが仰せに從ひまゐらせでは候べき。」と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそあはれなれ。さてこそこの御曹司を大將軍にてのぼせ給ひけれ。

吉村冬彦 本名寺田寅彦。理學博士。東京帝國大學教授。東京市の人。明治十一年生。
ヴェニス 伊太利北部、アドリヤ海に臨む港。
サンマルコ 西紀八三〇年に創建さる。
ローマ イタリーの首府。

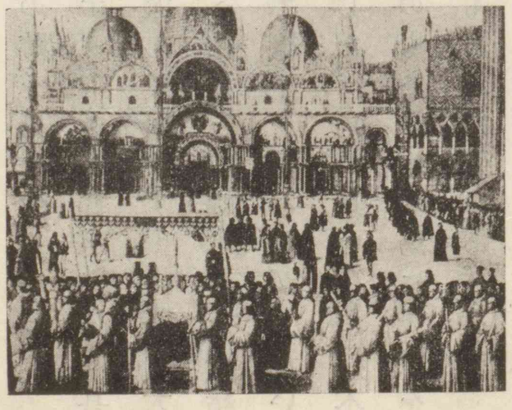
二〇 先生の許へ

吉村冬彦

ヴェニスから

お寺の鳩に豆を買つて遣るのは、日本に限ることと思つて居ましたが、此處のサンマルコのお寺の前でも、同じことをやつて居ます。但し、豆ではなくて、玉蜀黍を細長い圓錐形の紙袋につめたのを賣つて居ます。

、大道で鍋を煑立たせて、茹章魚を賣つて居る男が居ました。

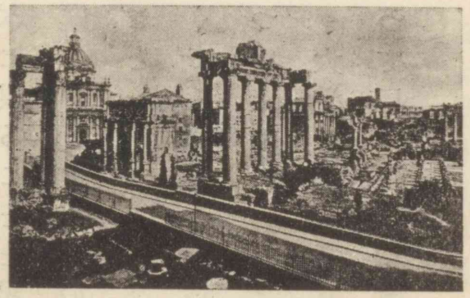


サンマルコ院

ローマから

アルバノの湖 ローマの東南約二十粁にある湖。
ロッカ・ディ・パ、 アルバノ湖の東方約一粁にある。
オリーヴ 橄欖樹。
大原女 京都市北郊大原村邊の婦人の風俗。
ヴァチカンの宮殿 ローマ市にあるローマ法王の宮殿。

ローマへ來て累々たる廢墟の間を彷徨して居ます。今日は市街を離れて、アルバノの湖からロッカ・ディ・パ、の方へ古い火山の跡を見に參りました。到る處の山腹にはオリーヴの實が熟して、其の下には羊の群が遊んで居ます。山路で、大原女の樣に、頭の上へ枯枝と蝙蝠傘とを一緒に束ねたのを載せて、靴下を編みながら歩いて來る女に會ひました。角の長い牛に材木車を牽かせて來るのもあれば、驢馬に炭俵を積んで來るのもありました。蜜柑の木もあれば、竹もあります。眼と髪の黒い女が水溜りのまはりに集つて洗濯をして居る傍には、雞が群れ遊び、豚が路傍で鳴いて居ます。ヴァチカンの宮殿も一部見ましたが、此處の名物は旨い物ばかりの樣です。



ローマ廢墟

モンブラン アルプ山脈中の最高峯。佛・伊兩國の境にあり、海拔四八一〇米。

伯林から

モンブラン

今度の旅行中は天氣の悪い日が多くて、殊に瑞西では雨や霧の爲にアルプの雪も見えず、割合に詰りませんでした。それでもモンブランの氷河を見に行つた日は天氣が好くて面白うございました。寒暖計一本提げて、氣温を測つたりして歩きました。鶴嘴の樣な杖をさげて、縄を肩に擔いだ案内者が、英語で案内者は入らぬかと云ふから、「お前は英語を話すのか。」と訊くと「いゝえ。」と云ひました。辷らない用心に、靴の

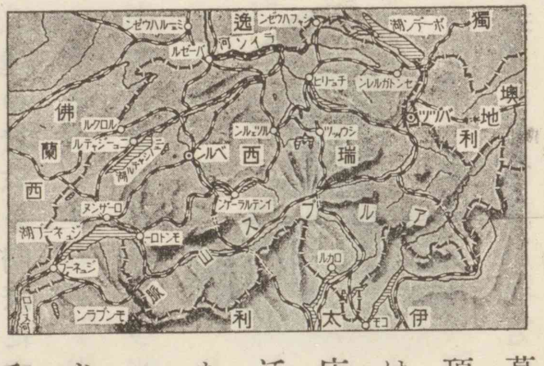
シャモニ　佛蘭西の東隅、モンブラン山麓にある。
マリヤ　キリストの母。

上に靴下を穿いて、一人で氷河を渡りました。それは〳〵好い心持でした。氷河の向ふ側は嶮しい急な路で、高山植物が岩の間に花を綴り、處々に瀧がありました。此處から谷へおりる途中、小さな飲食店の前を通つたら、後から一人追つかけて來て「お前は日本人ではないか。」と訊きますから「然うだ。」と答へたら「私は英吉利人だが、日本には八年間も居て、あらゆる高山へ登り、富士へは六回登つたことがある。」と話しました。

其處から谷底へおりてシャモニの町まで歩きましたが、道端の牧場には、頸に鈴をつけた牛が放し飼にしてあつて、其の鈴の音が非常に音樂的に聞えました。又番人の子供や婆さんも本當に繪のやうで、愉快でした。日本にもあるやうな秋草が咲いて居り、踏切番の小屋には菊が咲いて居ました。路傍のマリヤの御堂に花が供へてあるのも見ました。シャモニの町へはひる頃には、もう日が

ブゾン　モンブランの山中にある。
ジュネーブ　スヰス南隅の都會。
ベルン　スヰス共和國の首府。
チューリヒ　スヰス東北部の工業地。
ルツェルン　スヰス中部の都會。

暮れかゝつて、眞紅な夕陽がブゾンの氷河の頂を染めた時は、實に綺麗でした。町の通には、名物の瑪瑙細工やら牛の角細工を並べた店ばかり連なつて、かういふ處にはお極りの活動寫眞が自動ピアノで客を呼んで居ました。



ジェネーブからベルン・チューリヒ・ルツェルンなど見て廻りました。ルツェルンには戰爭と平和の博物館といふのがあつて、日露戰爭の部には俗惡な錦繪が澤山陳列してあつたので、少し厭に成りました。到る處の谷や傾斜地には牧場があり、林檎が實のつて美しい國だと思ひました。

（藪柑子集）

三宅やす子
故理學博士三宅恒方の妻。京都の人。昭和七年歿、年四十三。

二一 手紙雜感

三宅やす子

人は言葉なしには生き難いが、言葉は何時でも口から耳へばかり傳へる事が出來ると限らない。この場合、手紙が言葉に代つて、私達の意志を明瞭に表示して相手に傳へてくれるのは、心強い事である。

若し手紙が無かつたら――。單にかう考へるだけでも寂しい心持になる。

三宅やす子

考へて見るがいゝ。細かい文字で認められた手紙は、その封筒の宛名に從つて、ポストから郵便局へ、郵便局から汽車の中に積み込まれる。そして、山の間、隧道の中、人は退屈すると云ふ長い時を汽車に搖られて、人が旅をする代りに速かに旅をして用を話してくれるではないか。

その手紙を見た相手は、その文字によつて、書いた人の顏をありありと心に描き出し、その聲を聞くやうな心持になり、そして、にこやかに話しかけるやうな氣分で返事を認める。その返事は來た時のと同じ道を通つて遙々と此方へ訪れて來る。

手紙はその時〳〵の心の記念である。ある時にある事を斯う述べたといふ正しい記録である。

ともかく私達は「手紙」といふ言葉を耳にする時、そこに言ひ知れない多樣な感じを起す。何とも言へない一種の懷かしみを持つて、心の底にまで觸れて行く或物を感ずる。

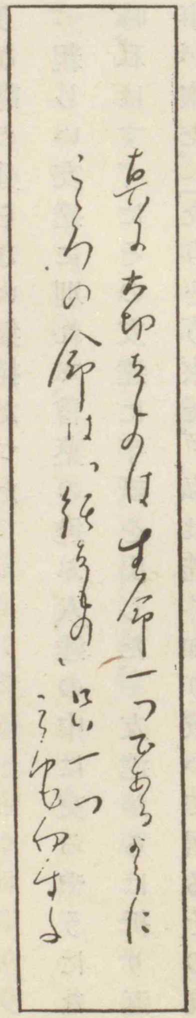
片假名を習ひ覺えて「ヲバサン、ゴキゲンヨウ。」と書き初める頃から、成長して世に生きて行く間に、私達は幾千通・幾萬通の手紙を讀み且認める事だらう。

そして、その認めた筆の跡は、多くは棄てられるのではあるが、若しそれが殘して置かれたら、その墨の跡、インキの字劃は、恐らくその人が世を去つた後、何年でも何十年でも消えないでゐて、讀む人の心にある感想を起させる事だらう。

私達は、紙魚の食つた日本紙に細かく書かれた墨の跡を、祖父の、大祖父のと、折々記念に見せられる事がある。何々何年亥の何日、そんな昔の〱事が記されてあればこそ、それが殘つて傳はるのである。

まだ見ぬ父母・祖父母の面影を手紙によつて想像する人も少くはあるまい。幼い時に別れた親の情深い記憶は夢ほどもない人が、年が長じて親の手紙を見出して、親はこんなにも慈愛の眼で自分を見てゐたのかと涙ぐませられる事のあるのも、手紙の活きた力だらう。

「手紙」――繰り返して言ふ、それは何と云ふ魅力を持つものだらう。「若し手紙が無い世だつたら」私はそれを考へるだけも悲しくなつて了ふ。


三宅やす子筆

手紙を一々保存して置く人がある。さうかと思ふと、返事を出して了つたものは、さつさと破つて棄てて了ふ人がある。久しい間澤山溜めて置いて、あとで一束にして焼いて、感傷的の氣分を味ふ人がある。何處にでも置き散らし、時には書物の間などに挾んだまゝ他人に貸して、つまらない内輪話を關係のない人に見られる人がある。

ずつと幼い時に通つてゐた學校の仲のよいお友達と別れる時、「東京に行つてもお手紙を頂戴。」「きつと。」と約束をすると、別れる悲しさよりも、早く別れて了つて手紙が貰ひたかつた。「一寸あの事。」「何、手紙。」「えゝ、手紙。」「はゝゝゝ。」「はゝゝゝ。」二人は轉げるばかりに笑ひ合つた。何となくきまりが惡いやうな、樂しいやうな、譯の分らない氣持だつた。

親しい友達に別れて、言葉の違ふ人達の中に交るやうになつた時、私はすぐにその友達に手紙を出した。友達からは折り返し返事が來た。「たうとう來た。」私は能く知り拔いて居るその友達の住所を繰り返して讀んで見たりした。私は又手紙を出した。返事はすぐに來た。

やがて物足りなくなつた。手紙を出せば返事が來る。併し、返事の外は先方から手紙をよこさない。

そして、手紙の往復は十日に一度が一月に一度となり、二月に一度が半年に二度となつた。

しまひには、人の傳言でその友達の動靜を知るやうになり、今では傳言する人も傳言すべき場所さへも知らない。

只始めて手紙を遣り取りしたあの時の胸の轟く思ひ「親友だ」と意識しようとした子供らしい喜びは、何時までも消え去らない。

或人が言つた。「母が亡くなつた時、早く亡くなつた父の手紙の束が澤山出て來ました。それを讀んで、父がどんなに私を愛してゐてくれたかと云ふ事を知りました。父や母の苦勞も分りました。なぜ母はもつと早くあの手紙を私に見せてくれなかつたのでせう。母は私には默つてその手紙の大きな束を行李の底に仕舞つて置いたのでした。何の爲に殘して置いたのか知りませんけれども、古びた、所々蟲の食つた紙が、かうして何時迄も殘つて居

るのに、その手紙を書いた人も、仕舞つて置いた人も、皆地に還つたのだと思ふと、あつけなくて、私は讀んで了ふとすぐに燃やしました。燃やして了つたら、急に泣けて〱仕方がありませんでした。

手紙が澤山一緒に來た時、一番好きな人のを一番後に讀むと云ふ人があり、又、それを一番先に讀むと云ふ人もある。何れも人間の心持の現れである。同時に、それは手紙の持つ大きな力である、表情である、心と心との限りのない交響である。

言ひたい事が澤山重なると、どうしても手紙が書けなくなる。それは心持の方が強く動いて、字で表す事に不滿を感じるからだらう。それと同時に、餘り手紙を書くことに得手でない人は、どうしても筆無精になり易い。逢へば親しさうに物を言ふ人が、別れて居ると何時まで經つても便りをよこさなかつたりするのは、此の例である　（アルス婦人講座）

本間久雄
英文學者。評論家。早稻田大學教授。米澤市の人。明治十九年生。

二三　婦人と文學的教養

本　間　久　雄

文學藝術に對する教養の程度は、直ちにその人の人間としての價値を示すものです。言葉を換へて言へば、その人がいか程文學・藝術を愛好し、理解してゐるかといふ事によつて、その人がいか程高尚な人であり、いか程人間としての味はひの豐かな生活を送つてゐる人であるかが分るのです。實際の事實に就いて見ても、文學・藝術の愛好者には、どことなく品があります。どことなく人間として精練された所があります。手觸りが柔らかで、どことなく深みがあります。と言ふのは、文學藝術を理解し、味はつてゐるからです。之に較べると、どんなに立派な着物を着てゐようが、どんなに富をもつてゐようが、文學藝術の理解をもたない人は、どこか下品です。總てが物質的で、手觸りが堅く、人間としての情味を缺

いてゐます。つまり、一種蠻的な感じを人に與へます。西洋でも心ある人は、最近頻りに、高雅な教養といふ事が、人間に取つて最も大切な條件であると說いてゐます。高雅な教養とは、上品で、風雅で、人生に對する理解があり、同情があるといふ事ですが、これは確かに人間に取つて最も大切な條件であるに違ひありません。この意味から文學藝術に對するその人の理解と愛好とは、直ちにその人の人格を象徴してゐると言ふべきです。そしてこれは婦人の場合に於ても無論眞理であり、同時に文學藝術の理解と愛好とは、婦人の教養に於て一層重大なものとなるわけです。

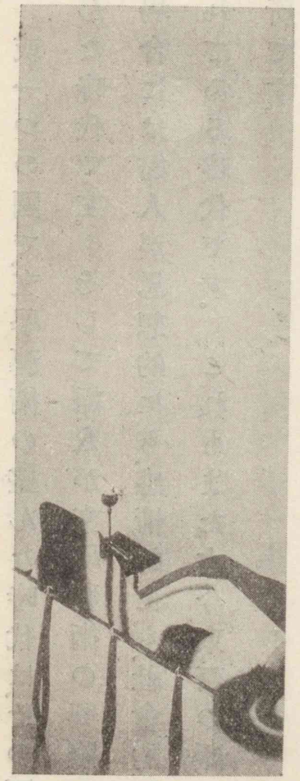
右の事實は、單に一個人の場合に於てばかりでなく、一國の場合に於ても同じです。つまり、文學藝術の如何によつて、その國のその時代の文化、または文運のいかなるものであるかを、容易に知る事が出來るのです。この意味で、文學藝術は一國文運の華である

と同時に、その國の文明を批判する唯一の標準であると言ふべきです。これは古今東西の歷史のよく證明する所である事は言ふまでもありません。

或一つの國で、文學藝術の盛んな時代は、その國の文運の最も盛んな時代です。そして婦人が文學藝術の興隆に與つて力のある場合には、婦人が思想的にも、感情的にも、社會的にも十分に認められてゐる時代です。これもまた古今東西の歷史のよく證明する所です。

試みに例を我が國に取りますと、かの平安時代の如きがそれです。即ちこの時代は、婦人も男子と同じく、思想的にも、感情的にも、乃至社會的にも、人間としての權利を主張し得た時代です。紫式部・淸少納言・和泉式部等の閨秀作家が輩出したこの時代は、單に我が國に於てばかりでなく、婦人運動の立場から見れば、世界の歷史

に於て屈指の黄金時代だつたのです。「文明と婦人氣質」といふ書物を著してゐるブラッドベリーといふ人は、平安時代を以て、婦人運動の立場から黄金時代であると解釋してゐる一人です。實際、この平安時代は、婦人の位置が非常に高かつた時代です。婦人が非常に尊重された時代です。またこの時代は、今日世界の問題になつてゐる婦人の經濟的獨立といふ事も、立派に實現されてゐた時代です。思想的にも、物質的にも、男女が一切同權だつた時代です。それが武家政治になつて、武力が最上のものと崇められてから、婦人は何時の間にか男子に隸屬するものとなり、その結果、思想的にも、



紫式部（齋藤弓弦筆）

物質的にも、婦人の位置が男子に比して非常に低級なものとなつたのです。

私は婦人運動の立場から、思想的にも、物質的にも、男女が同權だつた平安時代を憧憬すると同時に、その時代の婦人が文學·藝術を愛好し、理解した事を考へて、文化と婦人の文藝愛好との間には、切つても切れぬ關係のある事を、今更の樣に感じないではをられません。

（現代の婦人問題）

清少納言（齋藤弓弦筆）

永井荷風　名は壯吉。文學者。東京市の人。明治十二年生。

二三　春のおとづれ

永井荷風

寒い午後雨の夕方、風の夜と日數は經つて、二月も忽ち末近くなる。私は殆ど毎夜燈の下に聞き馴れた淋しい雨だれの一夜、外國の友達に長い手紙の返書を認めるのに案外の時間がかゝつて、二時近く寢床にはひつたことがあるが、其の翌朝いつものやうに再びおそく目をさますと、今度は屛風を漏れる日の光の明るさは無かつたけれど、私は二聲も三聲も續けざまに鶯の鳴いてゐるのを聞いた。

顏を洗ひに緣側へ出た時、私が何よりさきに感じたのは、日頃の長雨にしつとり濡らされた庭の土の色であつた。此の前始めて鶯を聞いた朝には、日光ばかりが春らしく輝いてゐたけれど、庭の地面は冬中の霜で見る影もなく燒けたゞれ、皹のきれたやうに割

れてゐる處さへあつた。それが今は幾夜の雨を十分に吸ひ込んで、恰も鍬で耕したやうに柔らかく平かに落ちつき、若しその上を歩いたら、人の足をも埋めはせぬかと思はれる。雀が幾羽となく飛び下りて頻りと何やら啄んでゐるので、私は人の眼には見えないさま〲の草の芽や蟲の卵が、いかに夥しくこの溫まつた土地の中に發生してゐるかを想像した。

萬物の母なる土壤が、旣にかくの如く穩やかに休んでゐることとて、其の上に棲息してゐる樹木は、何れも冬の寒氣に對する反抗的態度を改め、もう暴風に吹き倒される心配もなく、やす〲その枝を伸したやうに思はれた。中にも殊更優しく私の眼に映じたのは、庭の中央に立つてゐる大きな楓の木であつた。

鼠色した皮の上に、白い斑點のある太い幹が、びつしより濡れたまゝ乾かず、龜甲のやうな光澤を生じて、右に左に地上に匍ふ如く、

長い枝を伸してゐた。その如何にも自由な放縦な曲線の美しさは、私をしてうつとりせしめた。

楓の根元には、去年刈り込んだ野菊と薄の切株が、絹絲で繡取りでもしたやうに際立つて、黒い土の上に綠の若芽を出してゐる。椿の硬い厚い葉は陶器の表面のやうに輝いてゐる。梅の木は針のやうに尖つた枝の先に、其の色も其の大きさも丁度赤小豆の粒程の蕾をつけてゐる。

私は目のとゞく限り、仔細に朝の雨に化粧した庭の樹木を見廻してゐると、空は曇つたまゝ薄暗いのに、何處から漏れて來るとも知れぬ薄い日の光がぽつと流れ渡つた。冬であるならば、こんな薄い日の光では、大きな家屋の影が描かれまいのに、庭中の樹木は直樣その細い絲のやうな小枝の影までを、はつきり餘す處なく、濡れて平かな土の上に横たへた。

見てゐる中に日の光の強くなるにつれて、濡れた土地は薪か何かで地の底から燃やされるやうに、白い水氣を立てて乾きはじめる。私はめづらしい此の現象にいよ〳〵興味を覺え、食事もせずに緣側に腰をおろし、卷煙草に火をつけようとした。するとマッチは幾度すつても、何處から流れて來るとも知れぬ風の爲に、煙草の火のつく間を待たず吹き消されてしまふ。私は顏をあげて訝し氣に庭を見たが、細い楓の枝は少しも動かず、いづれの樹木も一齊に朝寢の自分と同じやう、如何にも大儀らしく靜止してゐるのである。漸くにして、非常に高い樫の梢に常磐木の細い葉が日の光にきら〳〵動搖してゐるのを認めたばかり。私は掌をかざしてもう一度マッチを擦つて見ると、小さな焰は掌の陰ながらやはり激しく動搖する。

私は始めて今朝の空氣全體が、風と名づけられて枝を動かすほ

どに強くはないけれど、如何にも廣く大きくゆるやかに動いてゐるのだと心づいた。

あゝ、凡ての物がこんなに軟らかく、こんなに優しく見えるのは、眼にも見えず、物をも動かさず、つゝしみ深い女の息のやうに通ふこの風の力であらう。私は暖室法の不完全な日本の家の冬中は、火鉢のそばに身を堅く折り敷いてゐた兩足をば、今日始めて長々と緣側の沓脱石の上に踏み伸した。それと同時に、如何なる時も深く懷中にさし込んでゐた片手をば、後について身を支へさせた。鶯は私が目の前の楓の木にとまつて、長い尾を敏活に振りながら、今は聲も惜しまずに鳴きつゞける。雀は庭中の枝に囀り、雞は何處か近くの家で頻りに時をつくつてゐる。植込を隔てた勝手の井戸端では、高話をしながら下女の笑ふ聲が如何にも他愛なく聞える。それと同時に出入の商人があける裏門の鈴の音、往來を

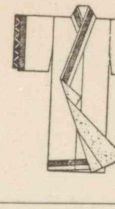
通る物賣の笛、何處かで囃す遠い太鼓の響などが、皆一緒になつて、空模樣の次第に晴れ、日の明るくなるにつれて、冬には聞かれぬ澄んだ強い響を私の耳に傳へて來るのであつた。けれども私は不思議な程それ等雜多な物音――鳥の歌、人の聲、場末の街の物音をば不調和に感じなかつた。丁度廣大な音樂堂で管絃樂が演奏される前に、幾多の伶人が幾多の異なつた樂器の調子をば各自勝手に調べてゐる時、其の不調和な響が演奏を待つてゐる聽衆の心には、時として演奏される曲よりも却つて深い空想を誘ふ――それと同じやうな心持がするのであつた。

（荷風全集第四卷）

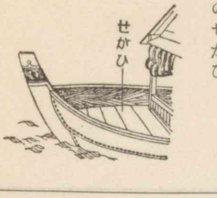
平家物語 十二卷。作者未詳。平家一門の興亡を敍した軍記物語。

判官 源九郎判官義經。

五つぎぬ



舟のせがひ

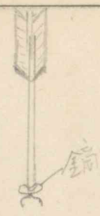


二四 扇の的

平家物語

さるほどに、阿波・讃岐に平家を叛いて源氏を待ちけるつはものども、あそこの嶺、こゝの洞より、十四五騎、二十騎うち連れ〳〵馳せくるほどに判官程なく三百餘騎になり給ひぬ。「けふは日暮れぬ、勝負を決すべからず。」とて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小舟一艘汀へ向つて漕ぎ寄せ、渚より七八段許りになりしかば、舟を横ざまになす。あれはいかにと見るところに、舟の中より年のよはひ十八九許りなる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを、舟のせがひに挾み立て、陸に向つてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して「あれはいかに。」と宣へば「射よとにこそ候ふらめ。但し大將軍の矢おもてに進んで、けいせいを御覽



ぜられんところを、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官「身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば「てだれども多う候ふなかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與市宗高こそ小兵には候へども、手はきいて候。」と申す。判官「證據があるか。」「さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官「さらば與市呼べ。」とて召されけり。

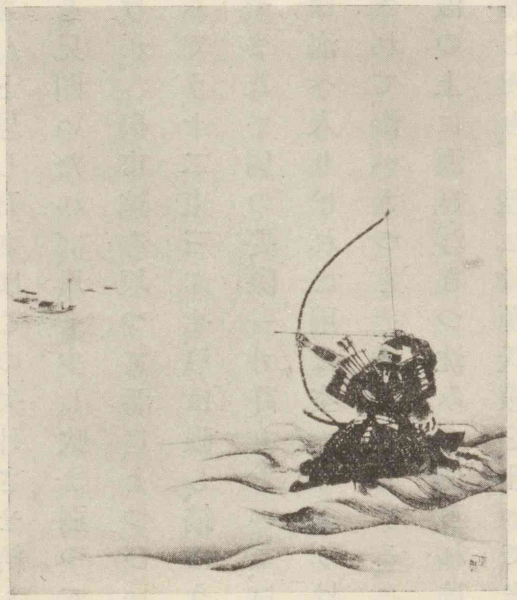
與市その頃は、未だ二十許りの男なり。褐に赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂に、萌黄縅の鎧着て、あしじろの太刀を佩き、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合はせて、はいだりけるぬための鏑をぞさし添へたる。重籐の弓脇に挾み、冑をば脫いで高紐にかけ、判官の御前に畏る。判官「いかに與市。あの扇の眞中射て、かたきに見物せさせよかし。」と

宣へば、與市「仕るとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢のきずにて候ふべし。一定仕らむずる仁に、仰せつけらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官大きに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へ向はんずるものどもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾う疾う鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與市重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はば外れんをば存じ候はず。御諚で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて、御前を罷り立ち、黑き馬の太う逞しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍おいて乘つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。

身方の兵ども、與市が後を遙かに見送つて、「この若者一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海のなか一段許りうち入つたりけれど

二月十八日 壽永三年二月十八日。

も、猶扇のあはひは七段許りもあるらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻許りのことなるに、をりふし北風激しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげゆりすゑて漂へば、扇も串に定らずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。何れも何れも、晴ならずといふことなし。與市目をふさいで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明・日光の權現・宇都の宮・那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇



那須與市（史畫百種）

の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再びおもてを向ふべからず。今一度本國に歸さんと思し召さば、この矢外させ給ふな。」と、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱つて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與市鏑を取つて番ひ、よつぴいてひやうと放つ。小兵といふでう、十二束三ぶせ、弓は強し、鏑はうら響くほどに長鳴りして、あやまたず扇の要際一寸許りおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ上りける。春風に一もみ二もみ揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の夕日に輝くに、白波の上に漂ひ浮きつ沈みつゆられけるを、沖には平家舷(ふなばた)を叩いて感じたり。陸には源氏箙を叩いてどよめきけり。

釋宗演　俗名は一瀨常吉。臨濟宗圓覺寺派管長。福井縣の人。大正八年歿、年六十一。

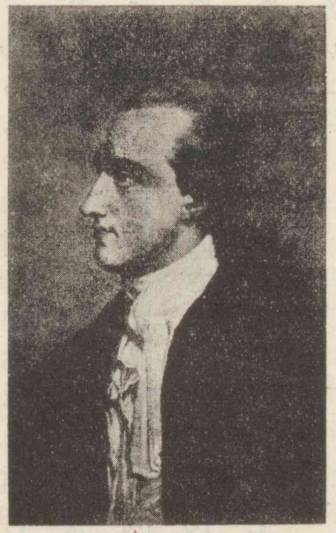
二五 信仰

釋宗演

ドイツの詩人ゲーテは「信仰はあらゆる知識の極度である。」といつた。知識が行詰つた時、眼前に橫たはつて居る黑金の垣を突破して、眞理の寶藏に進み入ることの出來る智慧と力とを與へてくれるものは信仰である。信仰はこれを譬へれば舟や筏のやうなものである。人間の生涯は「水の流と人の身の――」と、謠の文句にあるやうに、たゞこれ生死の流である。此の生死の流を渡る舟や筏が卽ち信仰である。舟や筏がなければ海を渡ることが出來ないやうに、信仰がなければ人生の海を渡りおほせることは出來ない。

普通に信仰といへば、單に慰安・氣休めになるものぐらゐにしか解されてゐないが、信仰は單に慰安・氣休めになるばかりでなく、人

を活動させる大原動力となるものである。信仰は人に勇氣を與へる、活氣を與へる、獅子奮迅の勢を振ひ起させる。信仰を得た人は、恰も飢ゑた人が食を得たやうなものである。眞理の大寶藏に向つて向上の一路を驀進(ばくしん)しようとする青年男女に、若し信仰がなかつたならば、所詮途中の障害物を突破することは出來ない。佛教では、信仰を稱して一に大覺といひ、大覺を得た人を覺者とも佛陀とも稱する。大覺とは平易にいへば「さとり」である。自覺覺他覺行圓滿の境地に至つたのが覺者卽ち佛陀で、佛陀になつたほどの人は、其の信仰によつて眞理を徹見する力を有して居るから、決して知識の行詰ることはないものである。向上の



ゲーテ

富貴も云々
「富貴モ淫スル能ハズ、貧賤モ移ス能ハズ、威武モ屈スル能ハズ、此ヲ之レ大丈夫ト謂フ。」
(孟子)

一路を驀進しようとする青年男女に信仰の必要な所以は此處にある。あのゲーテの言のやうに、信仰は如何にも知識の極度に相違はないが、これと同時に、また知識の端緒でもある。絶對や空想を排斥して、實驗を主とする今日の科學的研究法に於ても、其の基礎となるものは信仰である。信仰がなければ辨異・統同を行ふことは出來ない、歸納も演繹も批判も出來ない。富貴も淫することが出來ず、貧賤も移すことの出來ない道德的大勇猛心も、また信仰によらねば之を得ることは出來ないものである。

(叩けよ開かれん)

芥川龍之介　小說家。東京市の人。昭和二年歿、年三十七。

二六 蜜柑

芥川龍之介

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰をおろして、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈の點いた客車のなかに、珍しく私の外に一人も乘客はゐなかつた。外を覗くと薄暗いプラットフォームには、今日は珍しく見送の人影さへ跡を絶つて、たゞ檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しさうに吠え立ててゐた。これ等は、その時の私の心持と不思議なくらゐ似つかはしい景色だつた。私の頭のなかには、いひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪雲の空のやうな、どんよりした影を落してゐた。私は外套のポッケットへぢつと兩手をつゝこんだまゝ、そこにはひつてゐる夕刊を出して見ようといふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じな

がら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずる〳〵と後ずさりを始めるのを待つともなく待構へてゐた。ところが、それよりも先に、けたゝましい日和下駄の音が改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何かいひ罵る聲と共に、私の乘つてゐる二等室の戸ががらりと開いた。十三四の小娘が一人慌しく中へはひつて來た。と、同時に一つづしりと搖れて、徐に汽車は動き出した。一本づつ眼をくぎつて行くプラットフォームの柱、置き忘れたやうな運水車、それから車内の誰かに祝儀の禮をいつてゐる赤帽――さういふすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心持になつて、卷煙草に火をつけながら、始めて懶い瞼をあげて、前の席に腰をおろしてゐた小娘の顔を一瞥した。

それは油氣のない髮をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの

痕のある、皹だらけの兩頰を氣持の惡いほど赤くほてらせた、如何にも田舍者らしい娘だつた。しかも垢染みた萌黄色の毛絲の襟卷がだらりと垂れ下がつた膝の上には、大きな風呂敷包があつた。その又包を抱いた霜燒の手の中には、三等切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私は此の小娘の下品な顏だちを好まなかつた。それから彼女の服裝が不潔なのもやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから、卷煙草に火をつけた私は、一つには此の小娘の存在を忘れたいと思ふ心持もあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。すると、其の時夕刊の紙面に落ちてゐた外光が突然電燈の光に變つて、刷の惡い何欄かの活字が意外なくらゐ鮮やかに私の眼の前へ浮かんで來た。いふまでもなく汽車は今横須賀線に多い隧道の最初のそれへはひつたのである。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅された樣な心持がして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向ふ側から席を私の隣へ移して、頻りに窓を開けようとしてゐるが、重い硝子戸はなか／＼思ふやうに開かないらしい。皹だらけの頰は愈〻赤くなつて、時々鼻洟をすゝりこむ音が、小さな息の切れる聲と一緒に、忙しなく耳へはひつて來た。これは勿論私にも幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。併し汽車が今將に隧道の口へさしかゝらうとしてゐることは、暮色の中に枯草ばかり明るい兩側の山腹が間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも拘らず此の小娘は、わざ／＼しめてある窓の戸をおろさうとする。――其の理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、單に此の小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから、私は腹の底に依然としてけはしい

感情を蓄へながら、あの霜燒の手が硝子戸を開けようとして惡戰苦鬪する樣子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。 すると間もなく、凄じい音をはためかせて汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、たうとうばたりと下へ落ちた。 さうして其の四角な穴の中から、煤を溶かしたやうなどす黑い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲り出した。 元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顏にあてる暇さへなく、此の煙を滿面に浴びせられた。 お蔭で、殆ど息もつけないほど咳き込まなければならなかつた。 が、小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戰がせながら、ぢつと汽車の進む方向を見やつてゐる。 其の姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る〳〵明るくなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水

の匂が冷やかに流れこんで來なかつたなら、漸く咳き止んだ私は、此の見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸を締めさせたのに相違なかつたのである。

併し、汽車はその時分には、もうやす〳〵と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山との間に挾まれた、或貧しい町はづれの踏切に通りかかつてゐた。 踏切の近くには、何れも見すぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみ〳〵と狹苦しく建てこんで、踏切番が振るのであらう、唯一旒の薄白い旗が懶げに暮色を搖つてゐた。 やつと隧道を出たと思ふ――其の時、其の蕭索とした踏切の柵の向ふに、私は頰の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。 彼等は皆此の曇天に押しすくめられたかと思ふほど、揃つて背が低かつた。 さうして又此の町はづれの陰慘たる風物と同じやうな色の着物を着てゐた。 それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に

手を擧げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一所懸命に迸らせた。すると其の瞬間である。窓から半身を乘出してゐた例の娘が、あの霜燒の手をつと伸して、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖かな日の色に染まつてゐる蜜柑が、およそ五つ六つ、汽車を見送つた子供達の上へばら〱と空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、其の懷に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざ〱踏切まで見送りに來た弟達の勞に報いたのである。

暮色を帶びた町はづれの踏切と、小鳥のやうに聲をあげた三人の子供達と、さうして其の上に亂落する鮮やかな蜜柑の色と、——凡ては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎたが、私の心の上に

は、せつないほどはつきりと、此の光景が燒き附けられた。さうしてそこから或えたいの知れない朗らかな心持が湧きあがつて來るのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうに、あの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に歸つて、相變らず皹だらけの頰を萌黄色の毛絲の襟卷に埋めながら、大きな風呂敷包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる。——

私は此の時始めていひやうのない疲勞と倦怠とを、さうして又不可解な、下等な、退屈な人生を纔かに忘れる事が出來たのである。

女子新國語讀本 卷六 終

昭和八年八月十二日印刷
昭和八年八月十六日發行
昭和九年一月十三日修正再版印刷
昭和九年一月十七日修正再版發行

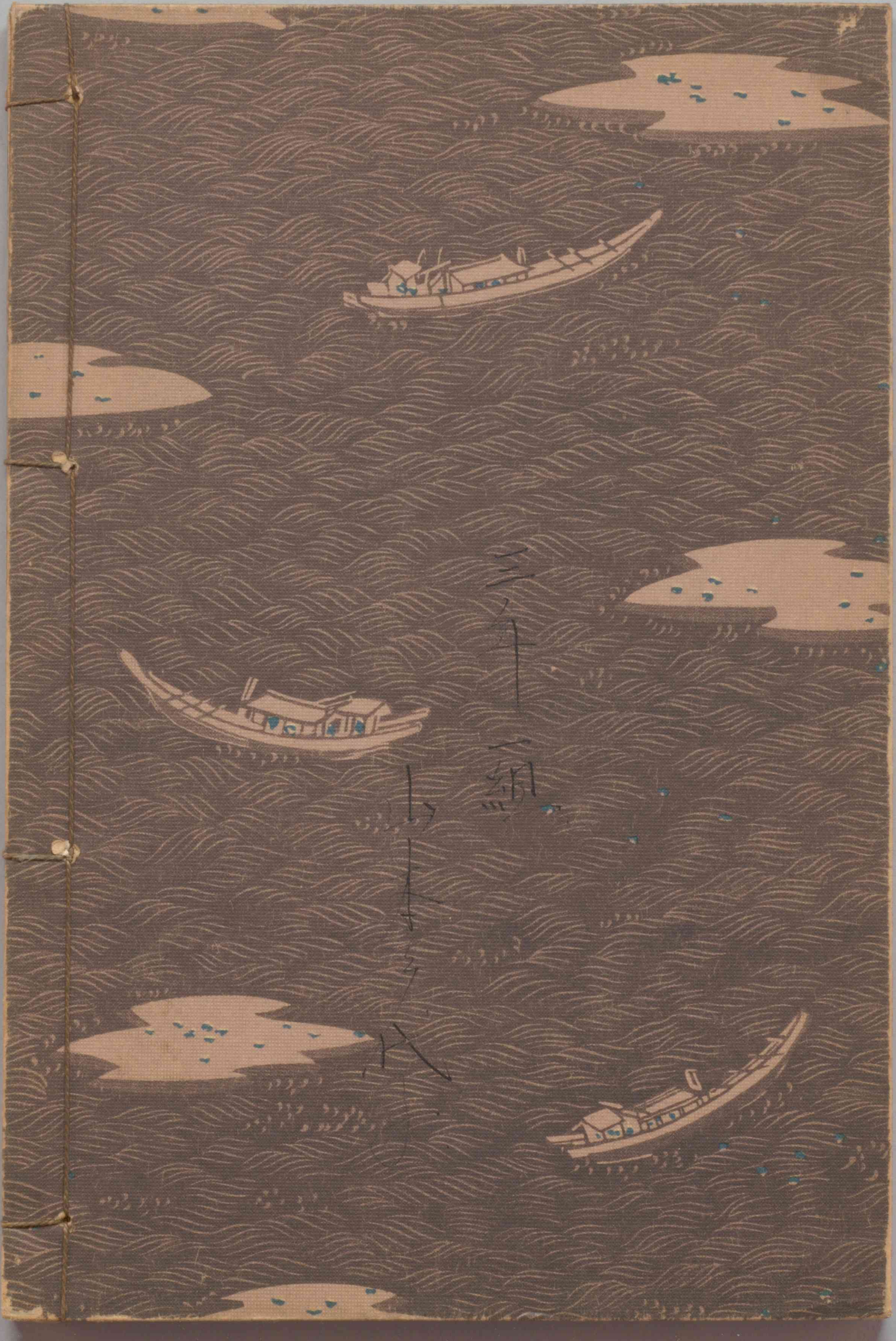
女子新國語讀本
定價 卷一——卷七 各金六十錢
卷八——卷十 各金五十八錢

編者 安藤正次
編者 東條操
發行者兼印刷者 東京市神田區神保町一丁目一番地 株式會社 三省堂 代表者 龜井寅雄
印刷者 東京市蒲田區仲六鄉一丁目五番地 株式會社 三省堂蒲田工場

發行所 (東京市神田區神保町一丁目一番地 振替東京三一五五五番) 株式會社 三省堂
(大阪市西區阿波座下通二丁目六番地 振替大阪八一三〇〇番) 株式會社 三省堂大阪支店

版權所有

長


三十一編
いとまき八